
チャイルド・ゲート

くるくるパスタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チャイルド・ゲート

【Nコード】

N9640U

【作者名】

くるくるパスタ

【あらすじ】

魔法溢れるこの国　グレーネス・エンパイア。大陸丸々1つと数え切れぬほどの島。北半球の全ての暖流、寒流、潮目がその領土の国には、魔法使いという、物理現象を支配する人種がいた。

とある街外れにいる少年、秋龍寺　紗雨は、究極に排他的な生活を送る秋龍寺　紗雨は、人との接触を忘れた秋龍寺　紗雨はある日チャイルド・ゲートと名乗る少女に出会う。

それを切欠にし、少女を巡る数々の思惑と策略と暴力とに紗雨は性格に似合わず真っ向から向かっていく

要するに魔法とは物理現象である（前書き）

まあよくある魔法ファンタジーです。世界観としては“科学”ではなく“魔法”という形で技術を得た世界。冷蔵庫とかカメラとかは普通にあります。

要するに魔法とは物理現象である

魔法

それは理に従い、順応し、法則に従い思想を崇める術

世には魔法が溢れ、魔法を使うものを魔法使いと呼称し、この世において優遇される人種であった。

そんな世の中。

そんな世の中に、その男は生きていた。

第1話 『要するに魔法とは物理現象である』

風が吹き抜ける。

木が、揺れる。

砂が、舞う。

夕日が燃える。

魔法が、飛び交う。

そんな日常を独り眺める彼の男。

名を秋龍寺 紗雨。所謂、魔法使いだ。

「えつぶしゆ！」

窓から外を眺めていたが初冬の外気に当てられ、冷えてしまった。窓を閉め、魔方陣を書いた小さなメモ用紙を薪をくべた暖炉に投げ入れる。

『万象定理への干渉を開始し、魔法を発動します』

紗雨が《魔力》をメモ用紙に書いた魔方陣に注ぐとどこからかが聞こえた。

……いや、正確にはこれは声ではない。魔法発動の際に起こる物理現象だ。

《魔法》とはこの世を構成するあらゆる《定理》や《法則》に干渉し、操りながらもそれらに従い、しかし自分の意のままの現実を

生み出すこと。つまり、物理的な法則に従い自分に都合のいい物理現象を起こすこと。そしてその物理現象を、人は《魔法》と呼ぶのだ。

ただ、人間は、魔法使用に於いて干渉する定理《万象定理》へ自ら干渉することは出来ない。だから、魔方陣を用いるのだ。

魔方陣とは或る万象定理を抽象的、暗号的に表したものだ。具体的に言えば紗雨が発動した魔法は《酸素の爆発的な化合》についての万象定理に干渉し、発火をさせる簡単な魔法だ。その魔法の行使の際、使ったメモ帳に書いていた魔方陣は《酸素の爆発的な化合》をはじめ、燃烧に便利な水素の関係式、現れる二酸化炭素や水の関係を全て記している(らしい)数学で言うのならば、三点一四…の円周率を で表すのと同じといえよう。

つまり、魔方陣とは万象定理そのものなのであり《酸素の爆発的な化合》の魔方陣が《酸素の爆発的な化合》の万象定理に干渉するということは、言い表すならば自分で自分の顔を洗ったり、自分の免疫が病原体を殺して自分の身を守ったりすることと似ていて、実は干渉は意外と容易いのである。

ついでに説明するならば、魔方陣に魔力を注いだときに聞こえたあの声は“^{えいきよ}盈虚の声音” や《ホロウ・ウィスパ―》と呼ばれ、その正体を簡単に言くと空気の振動である。まあ尤も、声の正体も空気の振動なのだが。

具体的に言くと魔法行使の際、使用するエネルギーが音エネルギーに変換されると奇しくも声のように聞こえ、またまた奇しくもその声は現在の万象定理の干渉の状況を説明しているように聞こえるのだ。

パチパチと薪が弾ける音がする。本やがらくたが散乱する部屋の中で唯一綺麗な暖炉の前。そこに陣取っている揺り籠椅子に座り込みぐらぐらと揺られる。

暖かくなってきた部屋。安眠を促す椅子の前後運動。昨日の睡眠時間1時間半。いろいろな要素が紗雨の臉にどンドン重石を乗せて

いく。

もういいから寝てしまおうといっそ瞼を閉じたとき“やつら”がやってきた。

「さっざつめ〜!!」

バダン!と木製の扉が吹き飛ぶのではないかという勢いで開かれた。

「姉上、紗雨の拙宅が壊れてしまうぞ」

何の考えもなしに扉を開ける馬鹿な女と人の家を捕まえて“拙宅”などと言い放つ失礼極まりない女。

「まあた火をつけたまま寝ちゃつてえ…火事になつて死んでも知らないよ?」

「姉上、紗雨が寝ているのにも関わらずそんな話しかけるような口調を取っているならば雪消はお前に対する態度をやや変えなければならぬと思うのだが」

「妹の言うべき台詞じゃない! 違うでしょ、これはあれよ、犬とか猫とかに話しかけるあれよ」

紗雨の無造作に伸びきつた黒髪をわしわしと撫で回す。

「……俺は愛玩動物なんだな」

「わっ! 起きた!」

「なにが『起きた!』だ、起きてたんだよ」

「姉上のことは気にするでないぞ、紗雨、バカなだけだ」

分厚い本を閉じながら傍によつてきた小柄な女。

「顔をよく見せる、紗雨。…久しいな2週間ぶり位か」

顔の両側を掴まれて見つめられるのが居心地悪いのか眠たげに目を瞑り頭を揺らす。

この女は秋龍寺しゅうりゅうじ 雪消ゆきけ。ついでにいうならばバカな方は秋龍寺しゅうりゅうじ 晴間はれま。2人は姉妹であり紗雨にとつても義姉であり従姉にあたる。本当は従弟なのだが秋龍寺家に養子に出された(と聞かされている)

「灯りつけるよ?」

何の返事もしていないのに天井に張つてある《太陽光の光エネルギー

ギーを粒子化保存』の万象定理と《光エネルギーの放出》の万象定理を記した魔方陣に魔力を注いだ。

魔方陣が書かれたメモ用紙が明かりを灯す。日光の5分の3の光量といわれているのでかなりの明るさだ。

明るくなるとこの家の惨状がよく分かる。家中が本に埋まっている。所々揺り籠椅子、所謂、ロッキングチェア以外の椅子や、大きな木の机、キャビネットや本棚などのまともな家具なんかも見られるが今やただ邪魔になっているだけである。

「これはもう片付けるのは諦めたほうがいいかもね」

晴間が溢れかえる本を眺めながら呟いた。

1ヶ月に二度くらい顔を出しているがその度に何故か本が増えていくのだ。もう読まなくなつた本を雪消が何度か譲り受けているのだが部屋は散らかり放題、そのくせ、何処にどの本があるのか把握しているらしいので片付けも拒否するのだ。

「ご飯も何日も食べてないんでしょう」

「飯くらいちゃんと食って……」

思い返せば思い返すほど何日もご飯を食べていない気がする。えと、断食何日目だ？

「3日くらいかな」

「3日!? そんなんだから背が伸びないんだよ?」

「……うるせえ」

紗雨は16歳にして142^{センチメートル}糶。そして21歳で160糶の晴間とは哀しい哉、圧倒的な差があつた。

「姉上、紗雨、そこにおるがいい。雪消が何かしら料理をこしらえよう」

「ああ」

再び椅子を揺らし始め本を開く。魔法使いにとって知識とは能力の要である。知識がなければ魔法が発動しないことも間々ある。科学であれ、文学であれ、エロ本であれ『読まなくて良い本はない』というのが紗雨の持論だ。

ばらばらと頁を繰るがやはり眠たくて仕方がない。

「姉上ー、何処かお皿を置けるところを確保しろー」

キッチンからヒョコツと顔を出して雪消が晴間に指示を出した。

確かに机にはお皿を置く場所などなかった。(2週間前に机の上は一掃したはずだが)

「めんどー」

「ぶっ殺ーす」

「ごめんなさーい」

暖炉の傍の机の上に山積みになっている本を取り敢えず退かす。

とは言え、汚いのは汚いので台拭きで机をざつと拭く。

何かを炒める音が響く。さっきまでお腹は空いていなかったのだがこんなに軽快に食い物が調理される音を聞くとお腹が空いてきてしまっじゃないか。

「もうできるぞー」

雪消の声に揺り籠椅子から立ち上がり、背の高い背凭れを持つ椅子の上に積まれていた本を退かしそこに収まった。

「おっ？珍しく紗雨が活発だ」

べたべたとくっつく晴間を鬱陶しく思いながらも久しぶりの人のぬくもりを嬉しく思っている。なんせ、人と関わらない人生を歩んでいるので、こういう《ふれあい》がないと人間味というものを忘れてしまいそうになるのだ。

「ほら、退いた退いた」

机に突っ伏す紗雨を起こしておかずの載ったお皿2枚とパンを載せたお皿、それとスープを並べた。

「じゃ、いただきます」

何故か晴間が手を合わせ、1番に食らいついた。

「姉上、お前まだ食うのか？ここに来る前、あれほどアップルパイを食べていたのに」

「五月蠅い！別腹だ、別腹！」

わーわーと騒ぐ晴間と雪消の狭間で、ゆっくりと魚のムニエルを

口に含んだ。

「どうだ？」

騒ぎながらもその様子を見ていた雪消が紗雨に訊いた。

「……うまい」

紗雨はボソリと呟き、スープを飲むために木のスプーンを手にとった。2人はその様子を、紗雨が食べにくくならない程度に見守っていた。

「じゃ、また来るからね」

「ああ」

家の扉の前。だいぶ日も暮れてきたので晴間と雪消は寮に帰らなければならぬ。

2人の通う《皇立・ストウレゴ―ネ帝宮学院》は全寮制の共学で、6歳から22歳まで魔法や一般教養、“異文化語”や国史などの必修科目の勉強を行う。

この国、魔法溢れるこの国の建国を記念して建てられたものであるため、かれこれ1500年以上は経っている。

初冬故にさつきまで藍色だったのにもう漆黑に色を変え始めた午後6時半。紗雨は疲れた身体を引き摺って家の中に戻った。久しぶりに食事をすると眠たくなっていけない。今日はベッドで寝ようと暖炉の火を消して毛布の上に乗っかっている本を退かせ、潜り込むしん、と冷えたベッドの中はやがて体温で温まり、やや早いが紗雨を実に2ヶ月振りの安息の眠りへと誘った。

「どういうことだ！あの子に逃げられるとは！」

とある塔。その管理人である男が部下に問い詰めた。

「も…申し訳ありません……。突然、連理の鎖が……」

「連理の鎖だと……？」

「はい。連理の鎖から、高密度の魔力…ストウラゴが放出されまし

て……」

魔法使いが魔法使いたるには、当然、魔法を使えなければならぬ。そして、魔法を使うには、魔力が必要となってくる。

これは、魔方陣に魔力の持つ《魔力エネルギー》という安直な名前のエネルギーを様々なエネルギーに変換することで魔力エネルギーを各種エネルギーに変換させ、魔法を発動するのに必要な物質で、“魔力”として使えるのは二種類である。

ストウラゴはその一つであり、秘造魔力とも呼ぶ（化学式St）「チャイルド・ゲートが目覚める……？国が滅ぶことになるぞ……」。

手段は問わん！何が何でも探し出し、必ず捕らえるのだ……！」「はっ……！」

塔の主人の命令を受け、部屋から飛び出したその部下。彼の左腕は放出された魔力がかすただけで消し飛んだ。ある冬の夜のことだった。

「あ……」

単調な声音だが一応、欠伸である。

目が覚めた。が、昨日の料理の所為で胃がもたれていまいち体調が優れない。しかたない。気は乗らないが街に出て薬でも買おう。

「よっこらせ」

久しぶりにベッドで寝た所為か身体が軽い。……胃は重いが。

寒いので着たきりの甚平の上にローブを着込む。眠い目を擦りながら紗雨は昼下がりの街に繰り出した。

「あの子だよ……」

「あの子が来たな……」

「おっかねえな。街を魔法で滅ぼす気が……？」

街人がひそひそと囁き合う。街外れに暮らしている秋籠寺 紗雨という少年はかなり有名なのだ。無論悪い意味で、だ。

それもそのはず。紗雨は18年通うべき皇立・ストウレゴネ帝

宮学院をわずか8年で卒業。しかも魔法技術は10才の頃全て修了した。残り4年は一般教養しか行っていないので、元々一般教養を持つていれば、実質、ストウレゴ―ネ帝宮学院を4年で卒業できることになる。

しかし、というか、当然、というか、そのあまりに強力な魔法技術から、一般人からは恐れられることも間々だ。それに、クビになったが護衛兵ガーディアンでもあるから。

「い…いらつしやい……」

「……胃薬……」

「い…胃薬ね。ちよつと待っておくれ」

皆と一様に紗雨にビビッている薬屋の店主。こそこそと奥に引込み薬の調合を始めた。

街の人間が自分を恐れているのは紗雨自身知っている。恐れる理由も知っている。だから、紗雨は極力街に出ず、たとえ出ても絶対に魔法は使わないのだ。

「さ…320クロウリーいただくよ」

麻の巾着袋から銀貨一枚と銅貨二枚を取り出し、震える店主に渡した。ちなみに、クロウリーとはこの国の貨幣の単位だ。

「釣りは…200クロウリーだな、ほら」

紗雨が出したのとは違う銀貨1枚を店主は紗雨に渡した。紗雨はそれを麻袋に仕舞うと、薬を持って出て行った。

今日は久しぶりに街に繰り出したことだし、当面の食料と本を買おう。

「おつ、誰かと思えば兄弟ではないか」

本屋、血霞ちがすみの館。一般的な本から、如何わしい本や《魔導書》まで揃えている胡散臭い本屋である。

「今日は良いもんを仕入れているんだ。ほら、見てみる。この本。

西方の光学系魔法の秀才、オーグリックオフティクス「エンドラルという魔法使いが撮った写真だ。見てみるってほら、ほぼ無修正だぞ」

店主が手に持つそれは魔法で光を投影した本。その魔法を発動したところの空間を切り取るように保存されるこの簡単な魔法で、女の裸体を写している。ついでに言うならばこの魔法で撮ったものを《写真》と呼んでいる。

「じゃあ、それも貰うよ。いいから頼んでおいた本をくれ」

「ちつ、つれない餓鬼だねえ。向こうのほうに該当した本を揃えているから適当に持っていけ。お代ならいらねーよ、どうせタダで貰ったものだ。この春画もくれてやる」

向こうのほうと指差した方向には古びた本棚。紗雨はこの男に《リミッター・チェーン連理の鎖》というものに関しての本を集め回ってもらったのだ。

「酔狂な男だよな、お前も。リミッター・チェーン連理の鎖なんて伝記に記されているだけで本当にあるのかどうかも分かんねえ代物の為に動き回るなんざ」
かくいう店主も紗雨の為にリミッター・チェーン連理の鎖の書物を集めて回ったのだ。

紗雨には相当の恩がある。

《リミッター・チェーン連理の鎖は万象定理の知識を遮断し、魔法行使を阻害する代物だ。応用すれば相手や自分の魔法の発動を防ぐことが出来る……」

床に座り込み本を吟味しながらリミッター・チェーン連理の鎖の知識を復唱する。

「でも、そんな代物手に入れてどうしたいんだ？他人に魔法を使わせたくないのか？」

「そんなことしてどうするんだ。俺は知りたいんだ。リミッター・チェーン連理の鎖の正体と、効果と、可能性を」

「……へっ、酔狂な奴だ」

「うるせ……っ……」

会話を続けながら本を読んでいると急な吐き気が襲った。

「どうした？つわりか？」

「誰が妊婦か。……悪いが、水を一杯くれないか」

「具合でも悪いのか？兄弟」

「腹を……少しな」

薬屋で購入した胃薬の入っている麻袋を振る。

「ちよっと待っている」

奥にあるキッチンに下がる店主。胃の辺りを擦りながら吐き気に耐える。あんな魚と肉程度で腹を壊すのは流石にまずいかもしいい。

薬を口に含み、本屋の店主が持ってきた水で飲み下す。この薬は《韓方》と言い、東方地域が生んだ素晴らしい内服薬なのである（かなり不味いが）

西方の薬と違い、気味の悪いものが多いが段違いに良く効くのである。

「それと、頼まれていた魔導書だ。これは金取るからな。原価でいい。4千クロウリーだ」

「つけてくれ」

「またか。……いや、だめだ。もういくらになると思っている」「ちっ、分かったよ。後で食料買おうと思ってたのに」

向こう2週間分くらいの食費を店主に渡す。

魔導書とは『魔法へ導く書物』のことで、具体的に言えばその魔法の行使に必要な万象定理に関しての知識と、記してある万象定理を暗号化して表した魔方陣を記している。

ちなみに、昨夕、紗雨がメモ帳に書いた魔方陣で魔法を行使したり、メモ用紙に書いた魔方陣を天井に張って光源にしたりしていたように、万象定理の知識さえ理解していれば、自分で書いたり、魔法で写した魔方陣でも同様の効果を得ることが出来る。

「これは……」

「ああ、凄いだろ。戦闘用魔法で最も強力とされる《ヘルゼプフス蠅王の闘気》エレクトリックに分類される電磁系の魔法だ。最近開発された魔法の中では最強と謳われるだろう」

「謳われてんのか？」

「いや、全然」

なんだそれと小さく苦笑しながら本を開く。題名は『a shooterplasm」

その名の通りプラズマを用いる魔法の魔導書だ。

「モノホリ単載の中でもこれはなかなか凄いぞ。プラズマは障害物をすり抜けて対象者を焼き殺す。……残忍な魔法だがお前も一応帝宮兵なんだから戦うだろっ?」

「……昔の話だ、もう戦闘なんてやってねーよ」

「なーにが昔だ、去年のことだろ」

基本的に魔導書一冊には3つ程度の魔法を記している。だが、用いる万象定理が多い強力な魔法は、モノホリ魔導書一冊に1つの魔法しか載せられないのだ。そういう魔導書を単載という。

「あと、すまないが風呂敷か手提げ袋を貸してくれないか、用意し忘れてな」

「ああ。ちよつと待ってろ」

春画を並べている本棚の横にある納戸から手提げ袋を取り出し、紗雨の方に投げてよこした。

紗雨はオーグリツクリミッター・チェーン＝エンドラルが撮ったエロ本と連理の鎖に関するの本を数冊と魔導書3冊を手提げに仕舞い、埃っぽい床から腰を上げる。

「ちよつと、食料品を買わなきゃいけないからもう帰るな」

「なんだ、つまらん」

暖炉で暖めていたブドウ酒を煽る。正直、客など紗雨しかないので本当に暇なのだ。まあ、収入は別口で得ているので別に構わないのだが。

「じゃあな兄弟。身体に気をつけるよ」

「ああ」

店の前で見送ってくれた店主に背を向けて冷える路地を歩いていった。

ということの家路。

クロウダー4千Kも払ってしまったので手持ちの金額があまりない。だから出来合いのものは買わず、旬で安く手に入るもの（主に大根）を中

心に買ったたりといった上手な買い方をして、なんとか2週間分の食料を手に入れた。

街の堀に架かった橋を渡り街を出て林以上森未満といった（決して名字ではない）感じのところにある未舗装の道をのろのろと歩く。結局夕方まで外を歩き回っていたのでしんどくて仕方がない。

「はあ……はあ……」

何処からか息せき切っている、といった感じの女の子の声が聞こえてきた。そう遠くはない。この道の向こうから聞こえているようだ。

「いたぞ！あそこだ！連理リミッター・チェーンの鎖には気をつける、あれの攻撃で卯乃城の左腕は消し飛んだらしいぞ」

どうやら声の主の女の子は追われているのだろう。ならばこの如何にもといった感じの声の主の集団がその女の子を追っているはずだ。なにやら込み合った事情がある模様。連理リミッター・チェーンの鎖には気をつける、とか、左腕が消し飛んだなどといった物騒なことを叫んでいるし。

……ん？

「連理リミッター・チェーンの鎖だと！？」

誰も居ないところで、柄にもなく叫んでしまった。なんせ、聞いたところで判断するところ、この如何にもといった男たちが追っている女の子は、今、それに関しての本を持ち歩いている連理リミッター・チェーンの鎖を持っていて、その女の子はこっちに向かって逃げているのだ。つまり連理リミッター・チェーンの鎖がこっちに向かって走っていることになる。

連理リミッター・チェーンの鎖の具体的な姿を知らないので頭の中で船の碇のようなものが人型になって走っている姿を思い浮かべる。……まあ、碇なんか女の子が抱えて走れるような重量ではないが。というか、やってくるのはあくまで女の子であって連理リミッター・チェーンの鎖のものではない。

そんなことを考えながら歩を進めていると、ついにその女の子がやってきた。

背丈は紗雨と同じくらい。若干痩せ気味ではあるが、ガリガリというわけではない。あまり食べていないのだろう。……ああ、だか

ら逃げ出したのか。ついでに残念ながらというか、当たり前だとい
うか、碇は携えていなかった。

「！助けて！お願い！！」

まだ何の返事もしていないのに紗雨の背後に隠れて盾にした。

走っていた軽鎧の装いをした数人の男たちもこの女の子が紗雨に
隠れているのに気付कि、身構えた。

「少年。その子をこちらに渡せ」

「断る」

「なんだと！？」

見ず知らずの女の子だ、簡単に引き渡すだろうと思っていたのが
紗雨の予想以上に大きな声で驚いた。リミッター・チエーン連理の鎖がそんなに珍しいか
……いや、紗雨もそれが目的なのだが。

というかこの女の子も紗雨の言葉に驚いているのようだ。

「彼女がチャイルド・ゲートだと知つての言葉か…？」

「チャイルド…？…？…？」

リミッター・チエーン連理の鎖にしか興味がないというか、リミッター・チエーン連理の鎖しか知らなかった
からチャイルド…なにかし某のことなぞ知るか。というかなんだそれ。

「知らないのか。ならちようどいい。お前さえ始末すればことは済
むようだからな」

「！」

相手の如何にもさんと同じく身構える。皇帝の住まう帝宮を護衛
する帝宮兵の実戦経験から傍にいる人を守る体制に入ってしまう。
経験というか癖に近い。

「おとなしくしている」

『万象定理への干渉を開始し、魔法を発動します』

藁半紙から炎が発現する。サジタリウス火炎系に属する魔法だろう。

『生体電気を増幅させ、大気中の水蒸気を電気分解し、酸素と水素
を採取。万象定理干渉の第一段階を完了しました』

盈虚の声音から魔法の発動までの時間が分かる。魔法のデメリッ
トは発動までの予備動作が長いということと、発動までの時間が

筒抜けということだ。

『採取した7つの水素を加重させ、七重水素を生成、射出可能状態にし、第二段階の完了を確認します』

もう間もなく魔法が発動される。もうこうなったら賽は投げられた。魔法は発動されてもいいから今やることは……

手提げ袋から取り出すのはエロ本……ではなくてplasma s hooterの魔導書。得意の速読で魔法発動待機時間内に万象定理を読みきり魔法を発動する。

『万象定理への干渉を開始し、魔法を発動します』

『使用者の生体電気を増幅させ、右手に正の電荷を持つ粒子、左手に負の電荷を持つ粒子を貯蔵します』

プラズマは正負の電荷を持つ粒子が同密度内に混在して、全体的に見れば電氣的に中性である物質の状態を指す。

つまりここで紗雨が両手を繋いだらプラズマが完成し、射出されるということになる。そしてこの魔法は干渉速度が速い。

『生成した七重水素の射出と同時に引火させ、万象定理への干渉の最終段階を完了するとともに魔法を発動します』

そんな盈虚の声音とともに凄まじい爆発が起きる。その爆発は、爆風がこっちに向かっていて、爆発自体がこっちに向かっていて、簡単に言えば直撃したら死ぬ。

『発動待機完了、万象定理の干渉を終了するとともに、プラズマの射出の準備を整えたことを確認しました』

粒子のチャージが完了した。これで両手を繋げばプラズマ砲が放たれるが……

足元に落ちていた小石を拾い上げ、両手を接触させ、プラズマを発生させる。発生したプラズマを小石の表面に滞留させ、実弾を持つプラズマ砲を作り上げた。

爆発は激しさを増しながら進んでくる。七つの水素原子を人為的に衝突させ作った、陽子七つ、電子七つの水素を持つ七重水素はどつやら普通の水素より燃えやすいようだ。

迫り来る爆発と爆風を冷静に眺め、その層が薄くなるところを見極める。そして、見つけた。

中指で小石を弾く。プラズマの手を借りマッハ級の速度で射出された質量を持つ小石が爆発と爆風を突き破り、纏っていたプラズマの電磁波が如何にもといった男たちを焼き尽くした。

「……ふう」

肩の力を抜き一息つく。これで邪魔者はいなくなった。

「大丈夫か」

リミッター・チェーン
連理の鎖の安否の確認をしようと振り返

「がはっ！」

何故か左の頬に凄まじい衝撃を受け吹き飛んだ。

「……？」

リミッター・チェーン
蹴り飛ばした相手は発光しているネックレスをぶら下げた連理の鎖の女の子だった。

要するに魔法とは物理現象である（後書き）

因みに此処での魔法の定義は基本、物理現象なので、物理のことが出てきますが、別にそっちの方面にメチャクチャ詳しいわけではないので、本やウィキペディアなんかで調べて書いています。

もしも矛盾点なんかを発見した場合はご一報いただけると嬉しいですよ。

どうせ書くんなら自分の精一杯のものというのが私のポリシーなので、ご連絡いただいたことは今後の参考にいたしますのでよろしくお願ひします。

味気ない一晚

「ぐっ…！」

右から来たおおよそ女の子の腕力とは思えないパンチを両腕を使
って防ぐ。

「おい、待て……」

軽やかに飛来する重たい肉弾攻撃をかなから躲す。体格上、肉弾
戦は不得意だ。

「助けてもらったこと、礼を言う」

「お前の礼は無礼極まりないな……」

「だが、私は誰にも捕まるわけにはいかない。あの男たちにも、お
前にも」

左、右、左と小回りの効いた鋭いパンチが飛ぶ。そして、遠心力
を生かした重たい回し蹴り。

襪褌のような服を着ているだけなので、上段蹴りをすると見えて
しまいそうだ。

「待て、俺はお前を捕まえるつもりはない…！」

なんとか躲し、防ぎ、そして言葉を紡いだ。お前を捕まえるつも
りは無い、誤解だ、と。

はた、と女の子の拳が止まる。紗雨さぐの鼻先数耗ミリメートルだった。

「お前、チャイルド・ゲートという言葉に聞き覚えは…？」

「ない。強いて言うならさつきあいつから聞いた」

あいつ、と指差すのは皮膚や肉体が焼け爛れ、息絶えている如何
にもさん。確かにチャイルド・ゲートと言っていたはずだ。

「ならば何故私を助けた」

「何故って……」

お前が助けると言ったではないか。という無粋なツッコミはしな
いことにする。それより迅速にコトを運ぶには他に言うべきことが
ある。

「お前の連理の鎖に興味がある」

「連理の鎖？　！神宝目当てか！！」

今度は右足の上段蹴り（幸い？見えなかった）。細く、華奢な白い足が刀のように飛んでくる。その刀を後退して躲し、彼女の左足を払った。

「ぐっ！」

こける彼女を押し倒し、馬乗りになった。

彼女の首を左手で押さえ込み、脅しとばかりに魔方陣を突きつける。これ以上動いたら燃やすぞ、と。

諦めたようにカクツと力が抜けた。……と、同時に彼女のネックレスが発光を止めた。

「……て……さい……」

「ん？」

突如、女の子が小さく何かを呟いた。

「離してください……」

文学でよく聞く“消え入りそうな声”というのは正にこのことを指しているのだろうかというような細かい声音。今までと違いこつちのほうが見た目に合っている。

いやいやいや。違うだろう。さっきとは口調が違いすぎる。憑き物でも憑いていたのではないかというほどだ。

「わ…私、殿方が苦手で…なのに、こんな……」

殿方が苦手だとお？殴る蹴るの暴行をしていたのにどの口がそんなことを言っているんだ。……口には出さないが非常に不満だった。

そんな些細な不満よりこの状況を考える。口調や雰囲気明らかに変わった連理の鎖の女の子。ふと、ある考えが浮かんだ。彼女を取り押さえた時に光を失ったこのネックレス。優勢と劣勢が変わったのを除いて彼女の変化前と後ではこのネックレスしかない。

これが彼女の雰囲気と多分身体能力を変えたのならこのネックレス、何かあるはずだ。もしかすると連理の鎖かもしれない。

魔法使い特有の知的好奇心がむくむくと鎌首を擡げる。そして、手

をそれに伸ばした。

「あつ！ダメです！！」

彼女の叫び声を聞いたときには、もう遅かった。

右手の指がそれに触れた途端、さっきまでの光とは違う、紅と黒の光が燦然と現れ、その光に飲まれる前に紗雨の身体は吹き飛んだ。

「……あ……ぐ……！」

右腕が燃えるように熱い。というか、右腕全体が火傷したように爛れている。ちょうど如何にもさん達のように。

「これは貴方の言っていた連理リミッター・チェーンの鎖で、私の身を護るようになってるんです。さっきの戦闘で連理リミッター・チェーンの鎖内の魔力がほぼ空でしたからそれくらいで済みましたが本来なら消し飛んでいましたよ？大丈夫ですか？」

自由になつたその女の子が歩み寄り、手を差し出してきた。

この状態に動じていない辺り紗雨と同じような目にあつた人間がたくさんいるのだろう。

「あつ、そうですね。治療しないと……でも、すみません、私、これの所為で魔法使えないんです。何かお手伝いできることはありませんか？」

「……鞆の中に魔方陣がある。それを全部出してくれ」
痛みに汗ばみながら左手で腰に提げていた小さな羊革の鞆を前に出した。

女の子も右腕に触れないように鞆を開け、数十枚のメモ用紙を適当に並べた。

『万象定理への干渉を開始し、魔法を発動します』

その中から魔方陣を一つ取り、魔力を注いだ。肉体を形作る元素を吸収して治癒させる魔法。下級魔法なので応急措置程度でしかないが。

「連理リミッター・チェーンの鎖は元々、チャイルド・ゲートという個体を保護するために生まれた物です」

紗雨が落ち着いたところで女の子は口を開いた。

「巷でも語り継がれているように、万象定理の知識や魔力を阻害する力も持っています。……まあ、吸収という形ですが」

「チャイルド・ゲートって何なんだ？」

「貴方の素性と思惑が不明な以上、それをお教えするわけにはいきません。ただ、極論から言うとチャイルド・ゲートとは私の名です」

「名前？」

グレイネス・エンバイア

魔法溢れるこの国は大陸全土に加え、数え切れぬほどの島。北半球全ての寒流と暖流と潮目に掛かるほど広大な領地を持っている。

よって人種も多々あり、地域によって名前の特徴も変わる。東方の果ての出身の紗雨は本名かどうかも分からないが、後見人の秋籠寺濃霧（雪消や晴間の母）の姓を名乗っているし、血霞の館の店主から貰った工口本を撮ったオーグリック・エンドラルは西方出身であるから名前の感じもだいぶ違う。

……が、チャイルド・ゲートなんて、東方、西方、北方、南方のどれにも当て嵌まらないだろう。この都は異文化が混ざり、変な名前になるというのも間々あるというのを考慮しても、だ。

ともあれば、この子に名前は無く、如何にもさんたちがこの子のことをそう呼称しているという可能性が出てくる。痩せている彼女は逃げて来たようだし。（見た目が東方人だから間違いなく本名ではない）

リミッター・チェーン

「連理の鎖はこのネックレスのことで、これがあれば私が死ぬことはまずありません。これは私の万象定理の知識を阻害し、魔法の操作を不可能にし、魔力を吸収することで魔方陣を介した万象定理への干渉を防ぎます。副産の能力として吸収した私の能力を解放して攻撃を行ったり、私：チャイルド・ゲートの身体能力を向上させたり出来るんです」

先程はお恥ずかしいところを……と言って頭を下げたチャイルド・ゲート。

「助けていただいたお礼をしたいのですが薄々感ずいているようにリミッター・チェーン連理の鎖を差し上げることが出来ません。というか、私以外が持つ

ていてもこれはただのネックレスにしかかなり得ませんし」

「お礼はいい。俺もお前の^{リミッター・チェーン}連理の鎖目当てで、動機は不純だ」

「お優しいんですね。……それで、あの……不躰ではありませんが、一つお願いが」

「……………」

「私を一晚、おうちに泊めては頂けないでしょうか……………」

「……………お前、男が苦手だったんじゃないか？」

「はい……それでもお願いしたいのです……！^{タワー}金字塔から逃げ出したはいいけど、行く宛なんて無くて……………」

「タワーとやらが何かは訊かない。面倒ごとに巻き込まれそうだから。」

しかし、こんな女の子をほったらかしてのうのと生きていける紗雨ではない。……いや、出来ないことはないがいまいち後味が悪くなる。

とはいえ、紗雨にこの街に知り合いなんていないし、血霞の館はこの子にとって外より危険だ。秋龍寺家でもいいが実のところ任侠一家なのでむさい男ばかりで酷だろう。……手を出すことは無いだろうが。

「仕方ない。来い、少し歩くぞ」

どちらかという紗雨の身体のほうがしんどいのだが、地理的な詳しくもあって優位に立つ。

重い手提げと食料を持って、紗雨は足を進めた。

第2章 『^{トナイユト}味気ない一晚』

「……………ここが……………」

雑多。ダウンタウンなんか似合いそうなこの言葉が狭い家屋に当て嵌まることはそう無いだろう。

だが雑多なのだ。基本的に本ばかりなのだがところどころ家具が面倒なので省略。

「適当に座るところを確保しろよ。なんせ汚いからな」
汚いことは自覚しているようだ。

「紗雨さん」

「なんだ？」

「有り難う御座いますね。無理を聞いてくださって」

「……気にするな」

水を自分のとチャイルド・ゲートのと注ぐ。

それをチャイルド・ゲートの前に置き、暖炉の薪を熾した。

「……」

「……」

会話が無い。もともと人と話さない紗雨は無理に会話をする発想が無いし、チャイルド・ゲートも男と話すのは苦手なのだろう。

ということを買ってきた魔導書を開く。さつきは速読で何とか魔法が発動できる程度に読んだが、じっくりと読んですっかり万象定理を理解することが望ましい。特に、蠅王ヘルゼラフスの闘気は万象定理の詳しいところまで理解していないと十分な威力が発揮されないことがある。先の戦闘も蠅王ヘルゼラフスの闘気の上級魔法にしては低威力だった。

「あの……」

「なんだ？」

「なにかお手伝いすることはありませんか？」

「お手伝い？」

「その、一晩厄介になるわけですし、なにかお役に立てればと……」

「……」

「あついえ、どうしてもという訳では……」

「……」

「……その……えと……ごめんなさい……」

「食料」

「えっ？」

ぼそりと紗雨が何かを呟いた。

「冷蔵庫に買ってきた食料を入れておいてくれ」

「はいつ！」

紗雨の言葉に晴れやかな笑顔を見せ、麻の袋を覗き込んだ。

「ひっ！」

小さな悲鳴を上げ、仰け反った。

紗雨が覗き込むと冬眠していないのか小さな虫が大根の葉を食っていた。色素の薄いその身体は確かに少し、いや、かなり、否、相
当に気持ち悪かった。

「なに、心配するな」

大根を手に取り暖炉の前で葉を揺らし虫を揺れる炎の中に落とす
た。

「な……なななな、何してるんですか？」

「あ？」

駆除をやったのに青褪め続けるチャイルド・ゲート。

「虫をそんな暖炉なんかに入れたら……入れたら！」

「入れたら？」

「夜な夜な虫の幽霊が暖炉の傍に……！」

「……………」

無視を決め込んで揺り籠椅子に座り、閉じていた魔導書を再び開
いた。

「あのお、お腹空きませんか？」

「お腹？いや、別に」

「そうですか……………」

再び黙り込む。

いや、合っているのだ、チャイルド・ゲートは。常人なら、まあ、
チャイルド・ゲートが常人でない可能性も大いにあるのだが……そ
んなことは今はおいて、この八時半という何ともご飯時な時間
(秋龍寺家での)はお腹が空いて然るべきだ。

「……………」

若干不満そうだが家主である紗雨がそうならそうであるしかない
と口を閉ざす。

「もう寝るぞ」

「え？」

もう？とか、ご飯は？とか、まだ九時前ですよ？とか、子供ですか？とか、言う前に紗雨は暖炉の火を消して揺り籠椅子に深く座り込み毛布を被った。

「ベッドは寝にくかったら本を片付けてくれ」

「あつ、はい。…いえ、あの……」

ご飯は……という声を出す間も無く紗雨は毛布に蹲り動かなくなった。

チャイルド・ゲートが紗雨と交流を交わすことの出来る唯一の一晚が終わった。

朝である。あれからチャイルド・ゲートはこんな早くから眠れるはずはないと思いつながら紗雨に倣って毛布に包まったが考えてみれば昨日は夜明けよりずっと前から走って逃げたのだから身体はくたくたで、すぐに眠りに就いた。

紗雨はまだ眠っているようだ。ロッキングチェアの毛布の塊が微かに上下していた。

「お腹すいた……」

眠い目を擦りながらキッチンの冷蔵庫に向かう。昨日お手伝いで大量の大根を収納したので場所も中身も把握している。

しかし、この大根はどうやって食べるのだろうか。

「……………」

取り敢えず手に取って見てみる。大根の料理は金字塔タワーにいた頃に何度か食べたが。

「……料理……ってどうするんだろう……」

まずは齧ってみる。冬野菜ということ瑞々しい旨みが広がる……が、何だろこの口の口に残る繊維質は。

「紗雨さん……」

ロッキングチェアに眠る紗雨を揺する。返事が無い。

「紗雨さん……！」

今度は強めに揺する。……しかしまたもや返事は無い。

困ってしまった。この大根の繊維質は些か耐え難い。

「起きてください紗雨さん」

「ん……」

ぺしぺしとほつぺたを叩くと流石に少し身じろいだが、やはり起きない。

「どうやって食べればいいんだろう……」

もう紗雨を起こすのは諦めて大根を見つめ独り呟く。

「取り敢えず皮を剥いたらどうだ？」

「わっ！起きた！」

「なにが『起きた！』だ、さっきので起こされたんだよ」

「それはそれは……ところで“皮”というと？」

「……お前、大根の皮を知らないのか？」

「皮？大根に皮なんてあるんですか？でも私の知ってる大根はこんな風に白かったですけど」

「もういい。切ってやるから包丁取って来い」

「はいはい」

きちんと俎板も持ってきた優秀なチャイルド・ゲートの期待と不安に満ちた（大袈裟）視線を受けながら、大根をザクザクと大きな輪切りにし、桂剥きをしてやる。

「おおお……。し……白の下に白が……！これは何という詐欺！欺瞞に満ちた野菜だったんですね、大根って」

「……………」

素で言っているのか何かのポーズなのか、何というか世間知らずなことを言っているのけるチャイルド・ゲート。大根に謝っておけ。

「ところで何で大根なんて食べてんだ？」

「食べやすい大きさに切った大根を渡しながら訊く。

「……………お腹空いちやって」

「起こせばいいだろう」

「憚られたんですよ。安眠妨害は」

「それで大根の食べ方が分からなくて起こしてるんなら元も子もないどころか大根を食べる意味もなくなるじゃないか」

「それは…そうですが……」

サクツと小気味いい歯ごたえの大根を食べる。繊維質も無く甘味のある美味しい大根だ。

「ちよつと待つてる。何か作ってきてやる」

「はい。…あの、では頂いたら失礼しますね」

「……そうか……」

大根は甘みがあつて美味しかった。紗雨の作る料理も恐らく美味しいだろう。

そんな味わい深い一日だというのに。

やはり何処か味気ない一日だった。

「お世話になりました」

昼過ぎほど。鱈腹昼食を喰ったチャイルド・ゲートは、饑別の大根のみを抱えて玄関先に立っていた。

「……気をつけて暮らせよ」

「はい。いざとなればこれがありますから大丈夫です」

これ、と掲げるのは連理の鎖リミッター・チェーンと大根リミッター・チェーン。連理の鎖はともかく大根でいったい何をしようというのか。

「では」

もう一度会釈をしてチャイルド・ゲートは歩き出した。

紗雨はその様子をしばらく見送ってから中に入った。寒がりな紗雨の身体は普段引き籠っていることも相俟ってすぐに悴んでしまう。暖炉の前に冷えた手をかざし、解凍するように揉んだ。

揺り籠椅子に座り込みオーグリック^{II}エンドラルの撮ったエロ本を開く。とても公衆の面前に晒せるような内容ではない写真が並ぶ。何故か分からない。

魔導書も、文学も、何もかも読む気にはならない。こうして官能

の扉を開いてみるも、どうにも気分が乗らない。

酒でも飲もうと立ち上がる。たしか血霞の館の店主に貰った葡萄酒が冷蔵庫にまだ残っていたはずだ。

もう二杯分ぐらいしかない葡萄酒の入った瓶を傾かせ、二杯分くらいは入りそうな大きな杯に淹れる。

寒いというのに冷たい葡萄酒を煽る。紗雨は気付いていない。自分が今どのような感情に晒されているのか。

……いや、本当は気付いているのかもしれない。ただ、己の中にそのような感情があるのかと疑っているのだ。

ストウレゴーネ帝宮学院にいた頃は相次ぐ飛び級：いや、特別クラスで独りで学んでいたため、同輩でルームメイトになる学院の寮には入れず、特別待遇の独り部屋だったし、今も夜を二人以上で過ごすことはなかった、帝宮兵の頃は勿論帝宮に暮らせるはずもない記憶にあるのは小さな頃に秋龍寺家にいたときと、一度だけ担当であった皇女護衛の一環でお忍びで宮廷の外に出たときだけだ。

まだまだ子供といってもいい年であるにも関わらず、人間と疎遠な人生を送っている紗雨は感情が鈍っているのだ。

“寂しい”という、単純で、悲しい感情が。

「これは…?」

血霞の館。その店主が新聞を読んでいると、とある記事に目を奪われた。

都の商人、エレレオスⅡフェティビエルが惨殺されていた。目撃人が1人いて、その者の話によると犯人は魔方陣を使わずに、水流系の魔法を発動していた。…といった内容だ。

エレレオスⅡフェティビエルといのはまあ結構有名な奴隷商の悪漢で、男は強制労働に、女子供は成金どもの性処理に使われていた。

そんなことより気になるのは“魔方陣を使わずに魔法を発動して

いた”ということだ。…これはまるで……

「やつらが…動いているのか…？」

ぶつぶつと一人ごちる。その言葉の真意は今のところ、彼にしか分からぬのであろう。

ふと、カランカランと入店を知らせる平和な音がした。誰だろうか、兄弟はつい昨日来た。つまりはもう2、3週間は来ないということだ。実際、二日連続で来た例^{ためし}などない。

「清明」

店主の名を呼ぶ声。その名を呼ぶのは都では“やつら”しかない。しかもこの声は

「レジエンディ。お前だろ？瓦版に載っているエレオノス」フェティビエルを殺したのは」

薄い金色の髪に釣り目、三白眼。凶悪な外見を絵に描いたような男、レジエンディ「オドリエル。“やつら”の仲間だ。

えらくタイムリーに犯人と思しき知り合いが訪ねてきたので問い詰めてみる。するとレジエンディは口を開いた。

「何を根拠に俺がやったと言っている」

「戯^{キャンサー}け。水流系、魔方陣を用いずに行使する魔法、エレオノス」フェティビエル、どれもこれもお前が犯人だといっているではないか。動機は何だ。昔の恨みか？」

「お前：知っていたのか？」

「当たり前だろう。俺を誰だと思っている。“あのグループ”の元リーダーだぞ。お前は幼少の頃、父親が謀反に失敗して国を追われ、没落貴族となったお前たちは母親と一緒にエレオノス」フェティビエルにオドリエルの敵対勢力の成金貴族に売られた。そして

「

「やめる！！」

魔方陣も持っていないのにレジエンディの掌には水の塊が躍動していた。

「そしてお前の母親とお前はその身を穢され続けながら生きてきた。

だから殺したのか？」

「……そうだ。まさかお前、俺を咎めるつもりか？悪魔祓いを口実に一般市民から金を巻き上げ続け、逃げるために人を殺し続け、拳銃に捕まった脱獄囚。そんなお前がこの俺を咎めるのか？」

まるで対抗するかのように、まるで抵抗するかのように、まるで同種だと相容れるようにレジエンディは店主の過去と身の上を口にした。

「ふん、まさか。……だがお前、“あれ”は世に出てはいけないものだぞ。もしあれが世に出てたくさんの方が使ってみる、全ての万象定理が崩壊するぞ」

「知るか。そんなこと」

そんな言葉に店主はハッと呆れたように吐き捨てて椅子に深く腰掛けなおす。

「それで？いったい何しに来たんだ？」

まるで古い友人のように自然な流れで店主の向かいの椅子に座る。いつもは紗雨が座る席だ。

「買い物だ」

「買い物？こんな辛気臭い本屋に何を買いに来たんだ」

「てめー自分の店だろ……」

「それで、何を買いに来たんだ？」

「魔導書だ」

「魔導書？お前が」

「ああ。“plasma shooter”モノホリって単載の魔導書なんだが」

「あー、悪いな。あれはもう紗雨に売っちゃったんだ」

あちゃーつとわざとらしく手で目を覆う。そんな態度が日々気に障るのだが。気になるワードが一つ。

「……紗雨？あの秋籠寺 紗雨か？」

「ああ」

店主が短く答える

「あの皇女殺しが？」

「……ああ」

店主はゆっくりと、温かいぶどう酒を口に含んだ。

帝宮兵という特殊な職業がある。

都“虚無の楔”

元・中華人民共和国西部・サハラ砂漠辺りから半径500キロメートルの

大地が何かの原因で大陸から削り取られてできた巨大な内海“奈落エクスデ

墮とし”に人工的に創った島丸ごと全てがその虚無の楔の範囲なの

だが、その都・虚無の楔のど真ん中にある帝宮“夢幻迷宮”を護る
武官の事を帝宮兵と呼ぶのだが、その特権から、汚い傭兵連中より
も粗暴な者が殆どだった。

魔法溢れるこの国はとても栄えている。帝国主義でありながら侵略をしないほどに。…だがやはりこの国も偏狭の地となれば治安が悪化してくる。そこで繰り出されるのが帝宮兵の遠征組。

しかし、彼らは遠征の途中に寄る町で横暴の限りを尽くす。それはそれは酷いことばかりをする。町の品物を強奪同然に掻っ攫っていき、道端に生えている草の根も売り捌く下衆で阿漕な集団。それが“帝宮兵”だ。

「ん」

いつの間にか眠っていた。パチパチと薪の弾ける音が子守唄のようになって。……いや、そんな詩人のような眠り方であるはずはない。昔から酒には弱いのだ。

アルコールの抜け切らない頭を押さえ少し考える。どういう経緯で俺は酒を飲んだのか。

……そうだ、チャイルド・ゲートだ。あいつが帰って（というか出て行って）何となく身が締まらないので勢いで酒を飲んで

「ちくしょう、頭が……」

何たる不覚か。初日で二日酔いの気分だ。よし、酔い覚ましには

もう一度寝るべきだ。

薬嫌い（かといつて頼らないことはない）の紗雨は酔い醒ましな
ど飲む概念もなく、暖炉の火を消して再び揺り籠椅子の毛布に顔を
埋めた。

味気ない一晚（後書き）

補足説明をさせていただくと、グレーネス・エンパイア魔法溢れるこの国は、ユーラシア大陸とアフリカ大陸の辺り全てがその領土で、大きく分けて、

北方（ロシア辺りの高緯度地域）

南方（アフリカや中東の辺）

西方（ヨーロッパ辺り）

東方（日本列島及び中国、朝鮮辺り）

首都（中国、カザフスタン、モンゴルの境辺りの大陸の真ん中）に分かれています。

エクスティンクション奈落墮としては大陸に開いた巨大な穴で、大昔に行われた魔法戦争の象徴として、魔法使いにモラルを与えています。だから特に法がなくても戦争が行われないんですね。

エクスティンクションそして奈落墮としを塞ぐように作られた巨大な島が作られました。フィル・ミス・フォーチュンそれが首都、虚無の楔です。

国家的には帝国主義ですが、国が繁栄しすぎて侵略は行っていません。

……とまあ、長々書かせていただきましたがご理解いただいて、拙作をお楽しみいただける助けになればとおもいます。

帝宮兵とはある種の負い目である(前書き)

今回少し短めに書きました。妙にキリが良かったです。

帝宮兵とはある種の負い目である

「紗雨」

リン、と軽やかで澄んだ鈴の音のような声が俺を呼んでいる。

ふと、気付いて顔を上げる。そこは各地方から献上された特産品や、帝宮お抱えの職人が造ったきらびやかな装飾品の数々があしらわれた豪華な部屋。……そう、ここは俺の仕えている人の部屋、内親王殿。つまりは皇女の部屋だ。

「職務中になに居眠りしてんのよ」

「え……？あつ、すいません、俺寝てましたか？」

「それはそれは気持ちよさそうに」

「いや、面目ない」

宮中には尚宮サンクンや内人ナイシと呼ばれる女官がそれぞれの御殿や厨房などにいるのだが、内親王殿にはいない。というか俺がいるから必要がないのだ。

「ねえ紗雨？」

「なんです？」

胡坐をかいて座って寝ていたらしく、身体が痛いと言を回していると皇女・キャロル様が俺の胸の中に凭れ掛かって座ってきた。俺はそんなキャロル様の頭を撫でてやる。猫のように目を細め少し笑みを浮かべてからそう言った。

若干取っつき難そうな冷めた顔つきと凜として鈴とした声音だがなかなかどうして愛らしいのだ。

「私……外に出てみたいのだが……」

「散歩ですか？珍しいですね」

「違うの！外って宮中、ラビリンス夢幻迷宮の外のこと！」

「……………」

いきなり何を言い出すのだこの子は。宮中から出るなんて滅多なことだぞ。

「皇帝様の許可とかはあるんですか？」

「父上の許可があれば私は今頃市場にいるだろう」

「……じゃ、だめじゃん」

「えー」

「『えー』じゃない。皇女が勝手に宮廷を出ていいわけじゃないじゃないですか」

俺の腕の中でいごいごと動く皇女。なんとというか、魔法溢れるこの国初の女性皇帝の資格を得た偉大なお方だということにも関わらず威厳の欠片の一片もない姿だ。ほら、俺にこうして身体を揺すって、騒ぐ前に宥め賺される姿なんてガキか小動物ではないか。

「紗雨」

「なんです？」

「私は紗雨のこと大好きだぞ？」

「そりやどうも」

「紗雨はどうだ？」

「大好きですよ？勿論大好きですよ」

「じゃあだーいすきな“主”であるこの私のために紗雨は一肌脱ぐうとは思わないの？」

えらく“主”を強調したなとも思う。キャロル様は勘違いをしているようだから教えてやろう。

「俺たち帝宮兵をはじめ女官や高官や文官、全ての“主”は皇帝様だからな」

「また細かいこと言ってー。禿げるよ？」

「そのときは育毛の魔法でも探しますよ」

「そんな魔法ばかりに頼ってちゃだめだよ？」

「キャロル様はその“特異能力”が発現しただけで既に世界最強の魔法使いですよ？ナノに魔法に頼るなどは」

「……そうね。いや、違う違う！外よ外！……ってそこ！舌打ちしない！」

「いや、都合よくお目出度い頭をしていらしている皇女様がそんな

滅相もないことを忘れてくれたらよかったなと」

「酷い！酷いよ！」

よよよ、と腕の中で泣き崩れる。はっはっは、その手段は配属³日目で慣れきってしまったわ。

「……それは申し訳ありませんね。お詫びとして皇女様が今何処に行きたいかお聞きしましょう」

「！だから大好き！」

キャロル様が俺のほうに向き直りガバツとしがみつくように抱きついてきた。慎ましやかな胸が顔に当たっている。そう、非常に残念ながら慎ましやかだ。

しかし、まあ、俺も何を言っているんだか。皇女を連れ出そうというのだ、辞世の句を考えておかなければ。

「えっとね。取り敢えず夢幻迷宮の近くの街にね、血霞の館っていう本屋があるの。それとね、ちよっと東方のほうになるけど温泉地があつてね」

「分かりました分かりました。行きながら聞きましょう。」

「……そうと決まれば、問題は抜け出す方法よ」

ふっふっふつとキャロル様の言葉に笑みを浮かべて懐から取り出すのは一枚の魔方陣を描いた紙。

「これはですね、光学系オプティクスの魔法で不可視インビジブルに分類される魔法の魔方陣です」

「わーお！大胆不敵！」

「もしとっ捕まったら俺のこと庇ってくださいよ？とくに不可視インビジブルの魔法は魔法科学省が使用を制限しているんですから、宮中で、しかも皇女連れ出すために使ったら……：……というか、皇女連れ出したのがばれたら確実に殺されますから」

「分かっている、分かっているって皆まで言わなくても！」

テンションが上がって仕方がないのか俺の首に腕を回したままばたばたと跳ね回る。まるで海鮮魚だ。鮪ギョリソウか鯉ギョリソウの類だ。

「これで姿を見えなくして警備兵ギョリソウの目を欺きます」

「紗雨天才！宇宙一だよこれは！」

あつはつはつはつは、と高笑い。さつきから笑いつぱなしだ。

「よし！褒美として温泉に行った暁には私と一緒に風呂に入る義務と背中を流される権利を与えよう！」

「……そんなことはまずは乳を育ててから言ってください　　ツフ！
！！」

近距離からの凶悪な顔パンに地に沈んだ。

第3話 『ヒズ・ザ帝宮兵とはある種のハスト負い目である』

「ん」

何だか既視感デジャヴを感じさせる声を発して紗雨は目を覚ました。……

何だろう、途轍もなく嫌な夢を見た気がする。具体的に言えば顔面パンチ。いやいや、違う違う。

「……昔の夢なんざ見るとはな……」

妙に年寄りめいたことをしてしまった。……いや、確かに世捨て人の爺さんのような生活をしているがしかしこちとらまだピッチピチの16歳だ。

「おいおい、涙まで溜まつてるじゃねえか」

呟きながら目くじらを拭う。本当に一体どうしてしまったのだろうか。

何だか後味が悪くて独り言が無性に多い。……が、酔っているわけではない。

傍にあつた時計を見る。もう夕方、いや、この冬場となるともう晩といつても差し支えない時間帯だ。どうやら4時間ほども眠っていたらしい。

皇女・キャロル。皇族なので名字はないが敢えて付けるとすればキャロルクレネスエンパイアクロウリー。

彼女は魔法溢れるこの国の初代皇帝アレイスタークレネスエンパイアクロウリーの直系の末裔にしてこの国で初めて女性にして皇帝……いや、寧ろ帝王と

成りうる資格を得た人間。

当時（と言っても一昨年か一昨々年）の皇室には4人の皇子がいた。いたのだが、その誰にも帝王になる資格がなかったのだ。

ふわり、と欠伸をする。既に普段の睡眠時間を超している為目が冴えている（瞼は重たそうだが。仕方ない、そういう顔つきなのだ）微かな空腹感。今日の昼と一昨日の晩はちゃんとご飯を食べたはずなのに、だ。何だろうようやく成長期か？

キッチンに向かい何かないか、大根しかないかと冷蔵庫を物色しているとはた、と気付いた。

そういえば俺、来週は誕生日ではないか、と。

「だからあんな夢を……」

来週、12月1日は紗雨の誕生日である（と聞かされている）……そして、この国の唯一の皇女だったキャロルの命日だ。

墓参りなどには行けない。皇族の墓は宮中にあるのだが、その皇女を殺した人間がそんなところに行けるはずなどない。というか今こうして都で暮らしているのも本当は危ないのだ。

「……寝よう」

冷蔵庫の詮索を止め、暖炉の前に戻る。別に眠たくない。寧ろ率先して眠くない。だが。だがしかし。余計なこと、過去の、過ぎたことを考えない為にはもう、眠るしかなかった。

「分からない」

血霞の館で店主は一人呟いた。なにが？とは誰も聞き返さない。当然だ。ここには誰もいないのだから。

レジエンディは2時間ほど前に帰った。……いや、帰るところがあるのか非常に微妙だが。

分からないのはレジエンディに帰るところが有るのか否か、ではない。何故奴が魔導書を欲したのかが。魔導書の意義は殆どが魔方阵だ。万象定理の知識は別に魔導書を使って得なくてもいいし、一

度憶えたらもうそれきりだ。魔方陣もコピーしてしまえばそれでいいのだが、これを誰かから教えてもらって描くのは難しい。

だが、魔方陣を用いないレジエンディヤ“やつら”……“あのグループ”が何故魔導書を欲するのか。

「……まあいいか、別に」

すっかり冷めてしまったブランデー入りの紅茶を、魔方陣も使わずに火炎系の魔法で暖める。火炎系というものの、発熱も可能な便利な魔法だ。

「邪魔するぜ」

「邪魔すんな」

突如、男が現れた。本当に突然、現れた。

身長はかなり高い。200糎はあるうかという程だ。

「安部清明だな？」

自分の名を知る男に驚愕し、その男の顔を見る。知らない顔だ。

それなのに自分の名を知っているということは……。

「お前、何者だ……？」

「なに安心しろ。帝宮兵でも魔術ウィザード・エリアの巣窟でもない。強いて言うなら

皇女殺しを捜す者、か」

「皇女殺し……奴をどうする気だ」

「殺す」

「……………」

えらく正直に言ったものだ。殺人は犯罪だぞ。

「どうして殺すんだ？あいつ、強いぞ」

「はっ、おかしな質問だ。理由を問う時点で少しばかりおかしい上に『あいつ、強いぞ』と繋げるのもどうかと思うがな」

当然のように、まるで親友のように店主の隣の椅子に座る長身の男。

「それで、だ。奴は何処にいる。お前なら知っているだろう」

「知らねーよ。実は俺はあいつの家を知らないんだよ」

知らないわけがないだろう。先週遊びに行ったわ。

「……………」

訝しげに店主を見る。見つめる。見定める。

「……そうか」

そして見誤った。

店主の杯の横に金貨を置く。帝都で製作された、公式の、そこそこ価値の高い金貨。つまりは3万クロウリ。

「情報料だ」

「……またのご利用を」

「ふざけんな。今回だけだ」

踵を返し、店主に背を向ける。まるで友人の帰り際のような親友の帰り際のような兄弟の帰り際のような、家族の帰り際のような。また来るぜ。

そんな言葉を残して。

「取り逃がしただと!?!」

とある塔。その主が部下の卯乃城の報告を受けるなり叫んだ。

「はい、笹木部他3名が死亡しました」

「……！チャイルド・ゲートか?」

「いえ、後を追って到着したウィリアムの報告によると小さな男の子だそうです。その男の子が魔法一撃で3人を殺したとか」

「男の子……………」

「はい。身長140^{センチメートル}糶^{セウ}ほどで、灰色の甚平と黒いローブを着ていて無造作に伸びた黒髪というのが特徴だそうです」

甚平?ローブ?不思議な組み合わせだなとも思ったが卯乃城が述べた特徴にやや心当たりがあった。

「もしかして、それ、秋龍寺^{しゅうりゅうじ} 紗雨^{さいう}か?」

「……おそらく」

「奴は…都にいるのか……………」

ダン!と、苛立ちに任せグラスをテーブルに叩きつける。

「忌まわしい大逆人が……」

「チャイルド・ゲートはどういたしますか？ 追っ手の者の知らせでは秋龍寺 紗雨とおもわれる人物の下を離れ単独で行動しているそうです」

「……よい判断だな。奴の下にいたら殺されかねん。あの子は絶対に殺してはならない。いいな」

「承知しております」

「……私は金字^{タワー}塔の方に行っている。何かあったら知らせてくれ」「畏まりました」

部下の男が部屋を出る。チャイルド・ゲート収容施設及び魔法魔術研究施設である金字^{タワー}塔の研究職員が暮らす施設、多宝^{タワー}塔。その頂上に位置する部屋から主は下を眺める。予知^{コシヨク}夢という万象定理を記した魔方阵が施設の敷地に大きく記されている。

法外の魔法研究施設というものは、どうしたって敵が多い。帝宮兵然り、闇の世界の住人然り、だ。これはそんな魔法使い連中対策だ。

「……あの子を…捕まえなければ……」

呟く。それは、まるで世界崩壊の危機に立ち向かう英雄のような声音だった。

「はぁ…はぁ…はぁ……」

息を荒れげ、ひた走る女の子。走りにくそうにも大事そうに腕に抱えるのは大根数本。チャイルド・ゲートである。

「待て！」

常套句を叫びながら追いかけるのは紗雨が殺したはずの如何にもさん。……いや、同じ格好をしているが別人物だ。

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ、つく！ あっ！」

体力を消耗し、足が纏れかけたところに運悪く小石出現。チャイルド・ゲートは頭からおもいつきり転んだ。

「う…くっ……」

「寧ろ追っ手のほうを心配すべきだったじゃあねーか」
ザリツ。ブーツが砂利を踏む。土砂ではない、砂利。
「チャイルド・ゲート。やっぱり連理リミッター・チェーンの鎖、貫リトルウィザードいに来たぜ」
東方最強の小さな魔法使い。皇女殺し、元・護衛兵ガーディアン。
秋龍寺、紗雨。

帝宮兵とはある種の負い目である（後書き）

なんか、紗雨のキャラを保ちつつ話を進めれる気がしないな……。

殺人鬼と殺人者

「おいおいおいおい。心配になって探しに来てみたら」

砂利を踏む音。怠惰そうな声。風の音。

「寧ろ追っ手のほうを心配すべきだったじゃあねーか」

人の気配。人影。人の存在。人ならざる魔力。

「チャイルド・ゲート。やっぱり連理の鎖リミッター・チェーン、貰いに来たぜ」

秋龍寺 紗雨。彼が、彼女の前に現れた。

「紗雨…さん……。」

力なく、空虚に紗雨の名を呼ぶ。 次の瞬間、紗雨の視界が黒

く染まる。……理解に数秒要した。それも、無理矢理理解させられたのだ。自分は顔を握り締められ地面に叩きつけられたのだと。

……叩きつけられるのだと。

しかし、その直前。その数刹那前。紗雨はチャイルド・ゲートの身体を思いつき蹴り飛ばし重心移動を生かし何とか態勢を立て直した。

リミッター・チェーン 連理の鎖は万象定理の知識を吸収する。つまり魔法をチャイルド・

ゲートリミッター・チェーン…連理の鎖に向けて放つとその魔法に使用されている万象定理を読み解かれ蜻蛉返りの様に自分の放った魔法がそのまま返ってくるのだ。数割り増しの威力で。(と本に書いていた)

「……激しい運動させんじゃねーよ。俺の基礎体力の無さ嘗めんな」
全く以つてして誉るべきではないことを平然という紗雨。

『魔力エネルギー操作を開始し、魔法を発動します』

手に握った魔方陣に魔法を注ぐ。

『魔力エネルギーを運動エネルギーに理論上変換し、使用者の身体に働きかけます』

魔力の持つ魔力エネルギー（安直）が、魔方陣を介して運動エネルギーに変換されていく。理論上変換とは、エネルギーの変換の手順プロセスを無視して特定のエネルギーに変換すること。今回は万象定理に

干渉することなく、魔力エネルギーを運動エネルギーに変換し、激しい運動を少ないエネルギーで行えるようにしたのだ。連理の鎖はリミッター・チエーン万象定理の知識を吸収して魔法を模倣するので、この方法は恐らく模倣されないだろう。多分。されたらヤバイ。

右足に力を籠める。大丈夫だ。前回のように動きさえ拘束すれば連理の鎖は停まり、元のチャイルド・ゲートに戻るだろう。リミッター・チエーン

運動エネルギーが付加される。チャイルド・ゲートが発揮したよ
うな、人間業とは到底思えないような運動能力を発揮する。たった
刹那でチャイルド・ゲートの背後に回り、左腕を首に回す。そして
右手で背中を前に押し、首と背骨を圧迫する。

「ぐっ…つく…！」

チャイルド・ゲートが苦しみの嗚咽を小さく漏らしながら右足で
紗雨の鳩尾を蹴り飛ばす。何の原理かは、どんな万象定理かは、あ
るいは万象定理などないのかは知らないが、平気で人体をぶち抜く
ほどの力を有している。無論、この場合も例外ではなく身体の小さ
い紗雨の身体などひとたまりもないだろう。

だから紗雨は咄嗟にチャイルド・ゲートの足の運動エネルギーを
超すほどの運動エネルギーを自分の身体に、彼女の足と同じ方向に
運動エネルギーをかける。不自然な体勢で後ろに飛び退く。…が、
僅かに足の先が当たってしまった。

「がっ！」

腹部から線状に出血する。ぶち抜く…とまでは言わずも、穴を空
けられてしまった。

「…つく…」

腹を押さえる。鮮血が掌から滴る。元来にして低血圧なので少し
フラツとする。

…格好良く登場したというのに、存外強くて少し恥ずかしい状
態になっているな。

「…ははっ。この間とは違って連理の鎖に魔力があるんだらうな。
リミッター・チエーン
運動能力も反射能力も格段に上がってる」

か破滅かだよ」

チャイルド・ゲート…否、リミッター・チェーンが右腕を突き出す。突如、電撃のようなものが射出された。……間違いない、蠅王ヘルの闘気、電磁系ゼラフス エレクトリック。

plasma shooterだ。

無条件反射的に避ける。自分でも出来ると思っていなかった。が、ローブの一部が消し飛んだ。

「はあ、はあ、はあ、はあ」

緊張で動悸が激しくなり出血が若干量増える。これはまずい。

「僕の姫と違って僕は姫の得た万象定理の知識を搾り取り、姫から搾り取った魔法を使って魔法を使えるんだよ。俺の制御下にある“チャイルド・ゲート”は迎え撃った魔法を反射するしか出来ないが、僕の記憶している万象定理を全て使えるから、今まで経験した魔法なら何でも使えるぜ、坊ちゃん」

台詞が長いうえにやけに説明口調だな畜生。腹が立つ。……いや、冷静になれ、落ち着け、カムダウン。こいつの話が本当とは限らない。こいつがたまたまplasma shooterを使えるだけかもしれない。……最新式の魔法とはいえ、だ。

「信用してないようだねえ、坊ちゃん。哀しいよ、おねーさんは」
「完全にお姉さんキャラじゃねーだろ！……うぐっ」

血が足りないのに思わずつつこんでしまった。

「無理しないでいーぜ、坊ちゃん。つつこみキャラなんざ無理に確立しなくても」

「そっちの無理かよ畜生！」

またつつこんじまった。

いや、落ち着け。出血して血は足りないが、大量出血ではない。こんなことなら鉄分他各種ビタミン、きちんと摂っておけばよかった。

「さあさあさあさあさあさあさあさあさあさあさあ、坊ちゃん。そろそろやるうぜ。僕…もう…我慢できない……」

あくまでお姉さんキャラで行くつもりなのか、こいつは。しかも
ちよつとエツチ系の。

「……んだ？こねーのか？坊ちゃん。だったら僕からいかせてもら
うぜ」

先と同様、右腕を突き出した。右腕を中心に同心円状の魔方陣が
具現する。どうやらこいつ、魔方陣を模写する必要すらないらしい。
恐らく、だが、自分の万象定理の知識を描画模写する必要もなく魔
方陣を具現化できるようだ。……そんな伝説があったらしい。魔力
征服という能力を有する選ばれた子供。万象の門の鍵……だったかな？

いやいや、そんなことはどうでもいい。こいつに勝つ方法は2つ。
前回のように身体でヤツの身体を押さえ込んで連理の鎖の停止を祈
るか、ヤツに万象定理の知識を記憶されても良いから反撃すら出来
ないような一撃決殺（殺さないが）を決めるか、だ。

問題は前者は連理の鎖が停止しなかつたら即死だろうし、後者は
決殺出来なかつた場合、もし同じ技を反撃されたら正直受け切る自
身はないということだ。元より躲せる技を出すつもりもないから躲
す事も出来ない。そして、更に困ったことにこの後者の場合は再び
チャイルド・ゲートが同じ状況に陥ったときにこれから発動する術
を模倣されてしまうという不安要素もある。

と、ここまでの思考に零点参秒。

魔力エネルギーの理論上変換が終わったのか、本来ホロウ・ウイ
スパ―鳴り響いているであろう時間が済んだのか、魔方陣が消える。
……来る……

「……！」

一瞬だった。一瞬で決められた。まさに一撃決殺だ。風が吹いた。
風が吹いたのだ。刃の如き風が。風の如き刃が。

術式分類：性質、蠅王の闘気 属性、疾風系。 蠅王の闘気高等位
魔法にして、疾風系準最高位魔法。 突風刻み。

全身から余すことなくサーピス精神たつぷりに大出血する。血が
噴き出る。流血ではなく噴血。まさかこんな躲しようのない魔法を

繰り返されるとは思わなかった。失策だ。ヤツの魔法を受けきつてからの行動しか計算に入れていなかった。

「……くっ……そっ！」

ふらつく足を踏みしめる。腕から、脚から、胴から四肢全てから“生命”が流れ出る。

『万象定理への干渉を開始し、魔法を発動します』

以前、リミッター・チェーン連理の鎖から発せられた魔力によって腕に怪我を負った際使った魔法で応急処置をする。というか、いまから言えばあの魔力はやはり plasma shooter だったのではないかと思う。

『万象定理への干渉を開始し、魔法を発動します』

また新たに魔法を発動する。

『上昇気流を発生させストームセルを積乱雲に変化させます』

巨大な…とまではいかないが、そこそこの大きさの積乱雲が差雨シアースとリミッター・チェーンの頭上に聳える。天災の支配に属する疾風アクエリ系魔法、ヴォルトアロー落雷。放たれるのは雷なのに風を司る疾風系アクエリアスに属している高等位魔法だ。

雲内に正負のイオンが入り混じり、電子が放出される。そして

音は無かった。いや、音が無いわけがない。音は有ったはずだ。しかし認識はできなかった。あまりの轟音。あまりの重音。鼓膜は震えたが音は伝わらなかった。下手をしたら鼓膜すら震えなかったかもしれない。

辺り一面に電撃が広がる。衝撃が、広がる。

静寂が辺りを覆った。

ドサツと、リミッター・チェーン…チャイルド・ゲートが倒れた。感電したのだろう。直撃はしていないようだが。

リミッター・チェーン連理の鎖に光はない。ヤツはもういないのか……？

「おい」

ぺしぺしとチャイルド・ゲートの頬を叩く。息はある。鼓動もあ

る。

……大丈夫のようだ。

第4話 『殺人鬼と殺人者』

ワイザードエリア
魔術の巣窟

魔方阵を用いることなく発動する魔法を使う集団。主に虚無の楔フィル・ミス・フォーチュンと西方地方を拠点している。

「……………」

その初代リーダー、血霞の館店主、陰陽師、エクソシズム陰陽術、あへの安部、せいめい清明。

彼は思考していた。レジエンディはつね「オードリエル。彼は現リーダー初音 伏臥ふくがに次ぐ実力者だ。水流系キャンサーの腕前は店主より上だろう。」

レジエンディがこの間殺したのはエレオノスキャンサー「フェイビエル。そして今度は彼と彼の母親を陵辱し続けた成金貴族の家系全員が殺された。明らかに一人で出来るレベルではない。なんせ、一晩で百数十人を惨殺したんだ。」

「やはり…動いているのか……………」

酒を口に含む。…………が、喉を通らない。

「紗雨は大丈夫か…?」

彼はレジエンディの母親を殺した張本人だから。

「すみませんでした、紗雨さん。あの時、冗談でなく私の意思はなかつたんです」

あれから、魔法である程度治療し寝かしつけていたが、チャイルド・ゲートが紗雨に謝罪した。いや、彼女の意味でないことは誰の目にも明らかだろう。

「いいから寝てろ」

チャイルド・ゲートの身体をベッドに寝かしつけ、毛布をかける。

「…………はい…………」

紗雨は腰を浮かせ杯に葡萄酒を注ぐ。思考するのは先程の不思議

体験。チャイルド・ゲートに宿っていたチャイルド・ゲート以外の存在、リミッター・チェーン。

リミッター・チェーン 連理の鎖の魔力そのもの、連理の鎖の代替品。そう言っていた。

つまりどういうことだ？連理の鎖の魔力がヤツの人格、つまりリミ

ッター・チェーンだとして、では連理の鎖本体はあのネックレス状

のあれはなんなのだろうか。リミッター・チェーンが連理の鎖の魔

力を司り、万象定理の知識を吸収、及び記録しているのならば……。

葡萄酒を嚙下し思考をやめた。分からん。あまりにぶっ飛んでい

る。まあ、ストウレゴネ帝宮学院を超飛び級で卒業したのだ。万

象定理や魔力なんかの知識は人百倍あると思っっているが……そのど

んな知識を応用しても解答に辿り着かない。
つまり、何も分からない。

レジェンディ＝オドリエルは今日この時点で既に40人の人間を殺した。

エレオノス＝フェイビエル、レジェンディを買ったサーザーキール家の連中数人、その辺の傭兵、その他自警団。

そして、これから秋龍寺 紗雨をその中に含めることになる。

レジェンディは黒い、拳銃を取り出した。ウォーターカッターの

キャンサー 要領で水流系の水を射出する代物。砕いたダイヤモンドを混入するようになっている。

「標的は帝都外れの小屋。難易度は最高。殺人はこれで仕舞いだ」

「お前、一体何者なんだ？お前を度々追っている奴らは何なんだ？お前は何を抱えているんだ？」

紗雨は起きたチャイルド・ゲートにいよいよ問いただした。

「……私は……金字塔タワーという非合法実験施設の実験体……でした」

「実験？」

「ええ、連理の鎖とリミッター・チェーンに関する万象の研究、で

たった一声で全てが静止した。
真横に、金髪があつた。

魔法と魔術と（前書き）

今回はかなり説明が入っています。正直僕自身も説明し辛いほど難しいです。

そんな今回ですが、お付き合いいただけたらとおもいます。

魔法と魔術と

静止した空間で全ての感覚神経が彼を認識した。

目が彼を認識した。

耳が彼を認識した。

鼻が彼を認識した。

肌が彼を認識した。

舌が彼を認識した。

そして、そして紗雨は認識した。どうしようもない理解。認め、識別するしか他ない圧倒的で暴力的で絶望的な理解。

『ああ、こいつは、テキ、なんだな』

テキ、敵。

……気付けば紗雨はチャイルド・ゲートの下敷きになって寝転がっていた。

いや、寝転がっていたと言えば聊か聞こえは良いが要するに紗雨は吹っ飛ばされて倒れていたのだ。数秒間、気絶していたかもしれない。

『彼』を認識したまでは憶えている。だがしかし果たしては一体どういう経路経緯でこんな状態になっているのか全く分からない。

今は『彼』の存在は認められない。認識できない。存在は認識できないし認められないが、それが果たして『彼』が存在しないということには、どうしたってならないので勿論のこと警戒は緩めない。

『彼』は遠距離から我が家を狙撃したと推測されるので、だから『彼』がここに居ずとも警戒を怠る気も怠ることもできないのだけだ。

起き上がって、再びチャイルド・ゲートを抱きかかえ走る。目的地などない。そして敵が何処に居るか定かでない今、この逃走行為

が果たして逃走になっているのかすらも分からない状況だ。

『万象定理への干渉を開始し、魔術を発動します』

そんな盈虚の声音が聞こえると同時に凄まじい瀑布が紗雨の身体を掠めた。

飛沫を若干量浴びた右腕から血が噴出する。

「あつ…痛う…！」

右腕に力が入らず、チャイルド・ゲートを抱えてバランスを取りきれなかった紗雨はおもいきりすっ転んだ。

「秋龍寺、紗雨」

ゆつくりと、手負いの紗雨にも聞こえるように口を開いた『彼』。

いつの間にか『彼』が目の前に立っている。

「元・帝宮兵護衛兵^{ガーディアン}。内親王殿付近衛兵。現在超級大逆人として皇帝閣下直々に手配書が出されているが、その功績と実力を讃えられ、怖れられ、畏れられ、事実上検挙は考えられていない。魔法溢れる^{グレイネス}この国史上初の特権謀反人…とまあ、俺の知っている範囲のことを誰に向けるでもお前に向けるでもなく嫌みたらしく語ったのだが……」

ゆつくりと歩き、紗雨の経歴を語る『彼』。そして倒れこむ紗雨の頭上に銃口を向けた。

「さて、今から俺が無意味に語るべきは、果たしてお前の呼び名の一つ“皇女殺し”^{ヒットタラー}のことが、俺の母親を惨殺したことが」

銃の周りで万象定理で生成された水が躍動する。これで引き金を引けば紗雨の、母の仇の頭は吹き飛び、消し飛び消滅する。だが、『彼』には出来ない。出来なかった。

「俺の認識するところではな、秋龍寺 紗雨。俺の母親、つまりところこの俺、Legendy"Ordriurの母Richer"Ordriurを殺した経緯はお前がSazakuelの傭兵と道ずれに無意味に無理解に無感情に無支配に無計画に無秩序に無韜晦に無用心に無難に無粹にぶっ殺したというのが俺の確認するところの母の死と俺がサーザーキールから逃げ出した原因なのだが、一体

全体絶対相対、事實はどうなっているんだろっな？」

紗雨は一切答えない。反応もしない。微動だにしない。紗雨が答えない限り『彼』、オードリエル「レジェンディは紗雨を殺すことは出来ない。」

「ああ、誰か答えてくれないかなあ。なあ、秋龍寺 紗雨よお」
それでもレジェンディは引き金を引いた。圧倒的な水圧が射出される。紗雨の頭1メートル右隣の地面が抉れた。

「なあ、秋龍寺 紗雨」

今度は1メートル左隣の地面が消し飛ぶ。

「なあ、コミットタブー皇女殺し。シリアルキラーなあ、殺人鬼。なあ、セルフクロウズ絶対領域。なあ、ミステイク拭れた天才。サウアンなあ、マジックボックス万象図書館。なあ、リトルウィザード東方最強の小さな魔法使い。答えてくれよ。俺は今に限ってはお前に言っただけ秋龍寺 紗雨」

紗雨の通り名二つ名を全て知っている。あまり知られていない、紗雨の病に關した二つ名まで知っている。

『万象定理への干渉を開始し、魔術を発動します』

『ストウラゴオキス酸化秘造魔力を還元し秘造魔力を生成。大気中のストウラゴオキス酸化秘造魔力を介し万象定理に干渉し、水素と酸素を強制収束し水を射出します』

魔方阵を持っていないのに恐らく先と同じ瀑布が放たれる。もう紗雨からの回答を諦めたのか思いつきり紗雨に向けて。

「……！」
瀑布が爆発する。紗雨とチャイルド・ゲートの身体上五十糎程上で。
リミッター・チェーン連理の鎖が光り輝いている。

さつきから正直気絶したふりをしていた紗雨は気が気ではなかった。今回は果たしてただ暴走していた『チャイルド・ゲート』なのか、若しくは『リミッター・チェーン』なのか。

「紗雨さんに手を出すなあ！」

チャイルド・ゲートの方だった。

「……………」
レジェンディがその姿を見てやや思案する。この女の子は確か俺

の魔術を喰らって気を失っていたはずだ。現に身体もボロボロだ、と。

「ノイズ雑音のような盈虚の音らしきものが聞こえる。」

刹那、莫大な量の水飛沫が辺りに散らされレジエンディの用いた大瀑布の術が発動された。

「なっ！」

予想だになかったことについて声を上げ、そして何の反応も取れなかった。

大量多量の魔力の水が、人影を飲み込んだ。

第5話 『魔法と魔術と』マスアンドサイエンス

その後、とりあえず差し当たったの宛が、知り合いの少ない紗雨には皆無なので血霞の館に向かうことにした。というか今到着した。「清明」

館の扉を抉じ開け中に入る。チャイルド・ゲートはリミッター・チェーン連理の鎖の魔力が切れたのかなんなのか分からないが、気を失っている。……と思う。

「どうした兄弟。可愛い女の子ぶら下げて」

「匿ってくれ」

「男女関係は怖いもんだな」

「いや、違う」

取り敢えずチャイルド・ゲートを床に降ろす。身体がズキズキと痛い。

「どうした兄弟。傷だらけじゃないか」

「ちよつとごたごたがあつてな。何故こんなことになっているかは俺には全く分からん」

「ははっ、三角関係か。ざまあみる」

「いや、だから違う」

疲れた紗雨はチャイルド・ゲートの隣に座り込む。全身の切り傷が痛む。昨日、リミッター・チェーンから喰らった突風刻みも完治していないし、さっきのレジエンディ…なんとかから受けた水流系キャンサーで治療した分の傷も全部開いたし。此処一週間の運の悪さに自分でヒいている。

「そつだ清明。一つ訊きたいことがある」

「そつか。俺はお前に訊かれたいことはないがな」

「“魔術” ってなんなんだ？」

「……………」

黙り込む店主。……訊いていけないことだったか？

「………… お前、それ何処で聞いた？」

「俺を襲ったレジエンディなんとかって奴が使った術の盈虚の声音が魔術って言つてたんだ。魔法、じゃなくてな」

「…… 魔術はな、俺が前いた組織が専らとして使う術だ。お前を襲ったレジエンディ〃オードリエルは俺のいた組織のメンバーの一人だ」

店主の前にいた組織、ワイザード・エリア魔術の巣窟とだけ聞いているが、詳しいことを紗雨は知らない。紗雨が店主と出逢つたのはこの魔術の巣窟をワイザード・エリア抜けた後だし、そもそも店主は自分の話をあまりしたがらない。

「まあ差し当たっては兄弟、取り敢えずお前とその可愛いお嬢ちゃんの傷を治さなきゃあな」

『万象定理への干渉を開始し魔法を発動します』

店主がキャビネットから魔方陣を取り出し、魔法を発動する。魔術を使う組織にいた店主だが、普通に魔法を使う。というか足を洗つてからは戦闘や回復に使うような大きな魔術は魔術を使っていない。

チャイルド・ゲートの血管から皮膚、筋組織や内臓が治癒されていく。対象者の自然治癒力を増幅させる系統の魔法なのでチャイルド・ゲートは回復が速い。連理の鎖は、リミッター・チェーン突き詰めれば防御や封印、そして回復などの万象定理の塊、魔方陣と同義ともいえる存在なの

で、その万象定理と魔力に常に触れているチャイルド・ゲートの自然治癒力はハンパではない。紗雨の落雷ヴォルトアローを受けても回復魔法一つで完治したくらいだ。

一方紗雨は普通の回復を見せている。チャイルド・ゲートと違い前回の小さな戦闘の怪我也まだ引きずっているので彼女の倍の時間は掛かりそうだ。

「それで清明。魔術って何なんだよ。明らかに魔法が出す威力の比じゃなかったぞ。少ない魔力の量で、だ」

「お前、酸化秘造魔力が何か…知っているか？」

「……バカにしてんのか？」

「いいから答えろ」

「酸化秘造魔力ストウラゴオキスって言ったら魔法使いが使った魔法が分解して空気中に発散された秘造魔力ストウラゴが二酸化したものだろう？」

「ああそつだ。転じて、万象定理の残滓とも取れる。魔法は万象定理を魔方陣として捉え、使用し、術式を発動するもんだ。他方、魔術は万象定理を酸化秘造魔力ストウラゴオキスとして捉え、使用し、術式を発動する、つまりはそういうことだ」

「……。すまない、全く要領を得ないのだが」

「では兄弟。万象定理とは何だ？」

「……魔法発動に必要な物理現象を証明した定理」

「それをどう使って魔法を発動する？」

「魔方陣として暗号化された万象定理に、秘造魔力ストウラゴと酸化秘存魔力マジカリアオキスを練ったものを注ぎ、エネルギーの理論上変換で以って万象定理に記された事象を発動させる」

ストウレゴ・ネ帝宮学院に居た頃に学んだことだ。確か卒業試験にも出ていたはずだ。

「それは、魔法使いの理論。物理現象を物理学的ではなく数学的に捉えた正に机上の空論。万象定理を御託で述べた場合の現象だ。

だが魔術は全くの別物。魔術は魔法や魔術の残滓である、使われた万象定理である酸化秘造魔力ストウラゴオキスを万象定理と捉えるんだ。万象定理を

物質として捉えるんだ。分かったか？」

「……全然」

「ま、優秀な魔法使いに魔術のことを直ぐに理解しろっつーのも酷ではあるがな。レジエンディと戦う前に魔術のことを理解しようっつてんならお勧めはしねーよ。それより対策を考えた方が遥かに懸命だ」

優秀な魔法使いには店主の言うところの万象定理を数学的に捕らえた考え方が摺り込まれているのだ。真逆ではなく寧ろ斜め四十五度の考え方の転換は容易ではない。

「使う魔力が少ないのは魔力の素を介して万象定理に干渉しているからだし、威力が高いのも万象定理を直接、本来の意味で用いているからだ」

店主が言う。つまりレジエンディが魔方陣を、万象定理を持ち歩かないのはこの大気そのものが万象定理、つまり魔方陣であるからだろう。

「ま、デメリットとしては酸化^{ストラゴキス}秘造魔力の濃度の違いで術の発動の可か不可かまで左右されるといふところだな」

「……」

店主の言わんとしていることは何となく分かる。

「もう分かるよな？ 奴は^{キャンサー}水流系をよく使う。つまりあいつの周りに^{キャンサー}水流系の万象定理をぶちまけなければ奴の魔術は、^{キャンサー}水流系に限って弱体化する。……俺から言えるのはこれくらいだな」

チャイルド・ゲートを治療していた術式が終了する。僅かにあった苦痛の表情が、チャイルド・ゲートから完全になくなった。完治らしい。

「俺はこのお嬢ちゃんを寝かしてくるからお前もしっかり休んでろ、兄弟」

「……ああ」

独りになった紗雨は少し思考する。レジエンディ＝オードリエル。金髪に三白眼、顔面凶器。彼の話によるとどうやら俺は奴の母親を

殺したらしいが……。

手早く思考放棄。殺した人間のことなど一々憶えていない。とうか憶えていられない、憶えられない、憶えない。あの顔面凶器にどことなく見覚えがあるから恐らく彼の目の前で殺したのだろうが……。

紗雨の異名の一つに殺人鬼シリアルキラーと言うものがある。あるいは殺人鬼、とだけ呼ぶこともあるが。

去年魔法溢れるこの国の皇女、キャロルを殺したことを切欠に発症した病の所為で矢鱈滅多に殺人を犯す様から付いた異名なのだが、そんな異名を持っていながら誰からも恨みを買わないわけがない。実際、仇討ち意趣返しなど日常茶飯事とまではいかないが、たまに外食に行く頻度で遭遇していた時期もあった。……ほんの三ヶ月前だが。

だからオードリエル「デージェンデイ、彼もその類なのだろうが……。正直これまでと格が違う。強い魔法使い程度ならいくらでもいたが、強い魔術師は一人もいなかった。

魔法が功を奏し大分身体が楽になる。

「……魔術、か」

数学的視点から計算する魔法。物理学的視点から計算する魔術。どちらが強力か、といえば無論後者だろう。店主も言っていた通り魔法は机上の空論。それを無理矢理現象として体現しているのだからある程度不安定なものではある。

だが対して魔術は元々の現象を現象として捉え現象を現象のままに現象として体現しているのだから、それは強力に決まっている。

「兄弟、どうだ？酒でも」

「馬鹿野郎。酔ったら戦えらんねーだろ」

部屋から店主が出てくる。何故か片手に大きな酒杯が提げられていた。

「んだ、つまらんな」

いつものテーブルのいつもの席に座り杯を傾かぶかせる。なみなみと

葡萄酒が注がれる。

そして店主がそれを嚙下したその時 血霞の館の扉が弾け飛んだ。

「！」

その轟音に紗雨は瞬時に身構える。

「おい清明」

水煙の向こう側から現れたのは当然と言つか残念ながらと言つかやはりレジエンディィーオードリエルだった。

「秋龍寺 紗雨がここにいるんだったらちゃんと連絡しろよ。探し回っちまった」

「ふざけんな。後でそこ直しとけよ」

「……こいつを殺してからな」

低姿勢で構えたまま魔方陣を握る小さな魔法使いに視線を向ける。

「……残念だな清明。この壁と扉は自分で直さなきゃなんねーみたいだぜ」

「そのようだな、兄弟」

無関心そうに葡萄酒を煽る店主。昔の仲間に対しても、今の友人に対しても存外そっけない態度を取っているのを見るとこの勝負の行方は見えてはいるようだ。されど昔の仲間にも、今の友人にも加勢はしないようだ。

「それから、やるなら外でやれよ。店が滅茶苦茶になる」

店主のその言葉は、もう店の外に出ていた彼らには恐らく聞こえてはいなかった。

とある塔。

その最上階で男は思考していた。

先ほど報告を受けた。魔術を用いる無目的集団。魔術の巣窟の一人、レジエンディィーオードリエルが秋龍寺 紗雨に対してアクシヨ

ウィザード・エリア

ンを仕掛けているとか。

秋龍寺 紗雨の傍にはチャイルド・ゲートがいる。チャイルド・ゲートの捕縛を急ぎたいところだが、無理に焦って彼女のことからジエンディ^{ウイザードエリア}・オードリエルに、ひいては魔術の巣窟に知れ渡りでもすれば大事だ。世界の終末といっても過言ではない。

それに既にチャイルド・ゲートの中では秋龍寺 紗雨に対して何の情も抱いていないというわけがないから、彼が死ねば感情が暴走しリミッター・チェーンが現れ連理の鎖^{リミッター・チェーン}が暴走するかもしれない。「冬秋斎の野望が果たされる前に何とかあの子を確保しなければ……」

またも彼の台詞は、いかにも英雄的な語意を含んでいた。

「はあ、はあ、はあ、はあ」

紗雨は逃げていた。

やはりレジエンディの水流系魔術は圧倒的過ぎる。正直強すぎだ。店主の話だと魔術は同じ場所で使いすぎるとストウラゴオキスの濃度が薄くなり術を発動できないらしい。

ということだ。紗雨は近くの森の狭範囲をぐるぐると逃げていた。爆音を立てて樹木が爆ぜる。大分術の威力が落ちてきたのか少々の飛沫を被っても然程の怪我をしなくなった。

『万象定理への干渉を開始し、魔法を発動します』
土中から岩の槍が辺りに乱立する。また新たな津波の魔術がそれから全てを根こそぎ薙ぎ払った。

……それにしてもおかしいことが一つだけある。単純なことだ。何故飛沫を掛かっても大した怪我をしなくなった程威力が下がったのにレジエンディは余裕の表情で高威力の魔術を出しまくっているのだろうか。

『万象定理への干渉を開始し魔法を発動します』
今度は電磁系の電磁波で防御する魔法。莫大な水圧により崩壊。

『万象定理への干渉を開始し、魔法を発動します』

今度は温度系テンバラチャの吸熱空間。魔術を凍らそうと試みるもその凍った氷ごと水圧が押し流し、崩壊。

『万象定理への干渉を開始し、魔術を発動します』

そして、今度はレジエンディの魔術が牙を剥く。

『H？O分子を凝縮し、超高密度水塊を形成します』

『水塊を槍の形で固定し下向きの運動エネルギーを掛け魔術を発動します』

超巨大な水の槍。それが真っ直ぐ、寸分の違いもなく、一刹那の迷いもなく落下してきた。

特異能力は知られた力であるが、その存在は異端である（前書き）

久しぶりの本当に久しぶりの更新です。

無更新の数ヶ月間、アクセス数が目も当てられない程に、当てたところでも0か1しかない2進数のような数値しか見えないのですが、とにかくそんな状況でありました。

……そうですね。僕が悪いです。忙しくてパソコン立ち上げる暇なかつたんですよ。

とかいって言い訳をしておりますが、今回は10進数昇格を祈って更新をさせていただきます。

長々失礼し本文の方にも、お目を汚すようですが目を通して頂けると幸いに思い、これからもご愛顧いただける事を祈っております。

特異能力は知られた力であるが、その存在は異端である

「そこまでだぜ、レジエンディ」

影が、手を頭上に翳す。

「スタートスキル。【エクソシズム陰陽術】」

定理の羅列が、辺りに広がる。

輝かしい輝きが燦然と溢れる。

盈虚の声音が何かを言ったが、紗雨には聞こえない。聞こえるが、聞き取れない。聞き取れるが聞き覚えがない。

水の槍が見る見るうちに消え失せる。清明の手に触れる前に消失する。

「ふう。悪いな、兄弟。うちの若いもんが」

「……………。なんのつもりだ、清明」

「俺のほうで聞きたいな、ボス番号。勘弁してくれよ、旧ボス。お前が邪魔したことはまあまあまあまあまあまあ許しておくとして、うちの若いもんと表現したのは流石に聞き捨てなんねーな、ええ？」

紗雨が清明に問うと、茶々を入れるようにレジエンディが口を挟んできた。

「かつ、黙りやがれ。親父の息子が親父になっても永遠に息子だつて話を知らねーのか」

「喩えの引用が微妙に分かり辛いんだよエロ本馬鹿」

「おい、待てお前ら。俺を置いて話を進めるんじゃない」

「なんだ秋龍寺 紗雨。俺は今忙しいんだよ。仇討ち敵討ちなんざに興じている暇なんざこれ一つもそれ一つも無いんだよ」

「一つだけ、溜め息をつき警戒を解く。」

「なら勝手にやってる」

そして、逃げた。

良いんだが、よ」

杯の中身を全て飲み干し、店主はこう言った。

「紗雨は俺にとって俺のそんな親心なんざ、踏み躪って然るべき存在なんだ」

「紗雨さん。私たちは何の罪があつてこんなところで野宿をしているのでしょうか」

「……………」

「紗雨さん。私は何の罪があつてこんなところで野宿をしているのでしょうか」

「……………」

「紗雨さん。紗雨さんがどうせ悪いことしたんでしようから私にせめて女の子としての尊厳を下さい」

「……………お前、ちよつと慣れて気が大きくなつてないか？」

「いえ、紗雨さんにある程度慣れたのはそれは確かですが、それ以上に私は非常に紗雨さんに文句を言いたい気分なのです。私は寝て起きて寝て起きたらこんな野宿状態なのですから」

その間にチャイルド・ゲートは二度手に負えない状況になつてい
るのだが、と誰にも言わぬまま紗雨は焚き火に木をくべる。

突然繰り広げられた店主とレジエンデイとの口論の際にチャイルド・ゲートを連れ出して姿を眩ませた紗雨は、取り敢えず我が家に戻つてみたのだ。しかし別に片付けて修理すれば全く住める状態だったのだが、よく考えなくても敵方に自分の住んでいる場所が知られている以上、そこに滞在しているとまた最初の繰り返しなので取り敢えず家は放置して近くの林以上森未満の場所（チャイルド・ゲートと出逢つた場所の近くである）の開けた場所で暖を取り、野宿を決め込んでいるのである。

日が暮れ始めたかと思うともう真つ暗だなー、と空を見上げ欠伸をしたところでチャイルド・ゲートが目を覚まし、それからずつと

この調子である。

「いいからもう寝ろ。五月蠅いな」

「生憎と今日は一日中眠ったり眠らされたりしてたんでこれ一つも眠たくないのです。紗雨さんは黙って夜間暇な私の相手をしていればいいんです」

チャイルド・ゲートの言葉を無視して持ってきた毛布に蹲る。

「いいですよ、もう。私は勝手に喋っていますから」

紗雨の毛布の殆どを奪い木に背中を預けた。

「紗雨さん」

「なんだ」

「紗雨さんはお疲れのようですから、もう勝手に眠っても結構ですよ。ただ私は頗る暇なので勝手に独り言を言いますがお気になさらず」

「……それは何かのフリか？」

「私のいた施設……恐らく、私が産まれずと其処で暮らしていた施設。謂わば実家ですね。その施設、金字塔^{タワー}。私は其処の特級研究被検体、所謂要注意人物^{イエローポイント}って奴です。私はそんな人間……いいえ、被検体だったんです」

紗雨の言葉を無視してつらつらと言葉を紡ぐ。

「私の検体番号^{ナンバー}は“チャイルド・ゲート”。検体番号^{ナンバー}の通り、チャイルド・ゲートという個体の研究を行いました。……というより金字塔^{タワー}、並びに多宝塔^{タワー}は私……いいえ、チャイルド・ゲートを研究の為に作られたと言って最早過言ではないという程です」

「……………」

紗雨は声を発しない。静かに、目を閉じ、彼女の、チャイルド・ゲートの、名も知らぬ少女の、何も知らぬ彼女の、声に耳を傾けるのみだ。

「私は怖かった……！私が何者であるかを知らされずに、チャイルド・ゲートが何者であるかを知らされる！チャイルド・ゲートの能力を！己がどんな状況でどんな行動をとるようプログラムされてい

るかを！だから私は逃げてきたのです。金字塔タワーの研究員は私の反逆を何より恐れていました。私を野放しにすれば何時世界が滅んでもおかしくないですからね。だから虐待に次ぐ虐待、責め苦に次ぐ責め苦、調教に次ぐ調教で私を制御しようとしてました」

感情が高ぶる。そして心境を語る。過去を語る。チャイルド・ゲートが見せたことのない表情が、表情は見えないが見えてくる。彼女の心を今初めて垣間見ている。彼女が彼女であった証拠、即ち過去の事象を紗雨に見せる。

傲慢ではない無韜晦。陶醉ではない被害公開。そして飾らず語る、本当の気持ち。

虐待に次ぐ虐待でも、責め苦に次ぐ責め苦でも、調教に次ぐ調教でも、御せなかった、自分ですら御し難かったそんな心を、彼女ははつきりと理解した上で、欠片の撞着もなく、紗雨に話していた。

たった一度の死別で狂い、たった一度の迫害で萎れ、たった一度の挫折で諦めた紗雨とは全くの正反対。

御し難い己が心情を無理解と自家撞着とで拒絶した少年とは、似ても似つかぬ純正な少女。名は無いがそれ以外の全てを持つ少女。欠点も、美点も、全てひっくりくるめて受け止めて、尚、笑顔でいるいたいけな少女。

自らの才能に恐れ、自らの才能を恐れられ、暴走し、意思の制御を不得手とし、自分の中に違つ自分を内包する。……紗雨とチャイルド・ゲート。何処までも同類な様で、実は何処でも異類な二人は、己の思うところを各々持ちながら己の思うところに心を寄せていた。

「それでも私は逃げてきました。オトマチック。連理の鎖リミッター・チェーンを使って研究員を一人傷つけ逃げてきました。自律駆動オトマチックになって傭兵や研究員を殺して逃げ

続けました」

「自律駆動？」

寝たふり聞いてないフリを決め込むつもりだった紗雨だが、つい聞き慣れない単語を耳にし声を上げてしまった。

「最初、紗雨さんに出会ったときに私、襲い掛かったでしょ？あの

時の私が自律駆動と呼称される状態の私です。私の能力、オヘレイトマテリアル魔力征服を解放し、筋組織に魔力を直接注ぎ運動能力を極限まで高め意識の三割以下をリミッター・チェーンに委ねた状態を言います」

紗雨が声を上げたのに対しての感想は特に抱かなかつたのかただ単にスルーなのか、極めて他人事のように、努めて事務的に己の知識を紗雨に告げる。

先にチャイルド・ゲートが言ったように、本当に全てを知らされているんだな、と紗雨は改めて思ってしまった。この女の子の恐怖も憎悪も嫌悪もお構いなしに。

「紗雨さんに私からしてあげられることは何もありません。今私の置かれている状況を話したところでなんの解決にもならないことは分かりますが、少しでも力になればと、本当に思います。……もう質問されても言いませんからね！」

何故か最後にそんな言葉を吐き捨て眠くないと豪語していたはずなのに毛布に包まり顔を隠した。

「……よく眠れよ」

『万象定理への干渉を開始し、魔法を発動します』

脳の働きを沈静化し、強制的にレム睡眠に移行させる魔法。それをチャイルド・ゲートに掛けた。非常にすまないが、またもう暫く寝てもらうことにしよう。

「出て来い」

催眠魔法でチャイルド・ゲートが眠つたのを確認した後、雑木林の中に声を掛けた。

「流星我が兄弟だ。お嬢ちゃんに気付かれないようにはしたんだがな」

「コイツが気づかなくて、俺が気付いたってだけだ。まあ、それでもレジエンディと思っていたからつまりは気付けていなかったんだがな」

「何の用か…は、分かるか？」

「ははっ奇遇だな、今から俺が訊こうとしてたんだよ」

紗雨は立ち上がり、焚き火を消した。

「場所を変えよう。こいつを起こしたくない」

二人は暗闇の中に消えていった。

……と言うのも、焚き火を消したのだから何処でも暗闇で、だから別になんてことは無い、ただ本当に場所を変えただけである。

「お前、このままじゃレジエンディには勝てねえぞ」

「座つて早々何が言いたい。戦闘途中に昔のボスと口喧嘩する様な闘い慣れしてねえ若造なんざに後れはとらんさ」

「お前に若造といわれると中々の屈辱感だろうな。……、いや、そんなことはどうでもいいんだよ。魔術と魔法がぶつかって勝てるわけがねえ。太古、全く同じ実力の魔法使いの大逆人と魔術師の皇帝が戦つて勝つたのはやはり魔術師の皇帝だったんだよ」

「……。アレイスター「クロウリー」、か魔術師だったんだな」
初代皇帝・アレイスター「クロウリー」。彼が“魔法の父”でなく“魔術の父”と謂われていた所以を垣間見た気がした。

「ああ。だから、だ。お前に魔術を習得させようとしたんだが…やはり無理だと思つてな。代わりに魔術を用意してきた」

「話を勝手に進めんなよ」

「学院で名前だけは聞いているだろう“特異能力”のことだ」

「特異…能力」

「西方人はError Skillと言うものも多いようだ。かの天上人、ガリレオ「ガリレイは東方で特異能力を発見したらしいから、特異能力、と言うのがやはり一般的な呼び名だな」

天上人と言うのは世を揺るがすような歴史的発見、或いは偉業を成し遂げた人物を差す。ガリレオ「ガリレイは言ったとおり特異能力の発見などが讃えられ天上人と認定された。

また、ガリレイは西方四賢人と言うアレイスター「クロウリー」時代の大魔法使いの一人としても知られる。

「特異能力と言うのは得てして忌まわしい能力だからな、学院では知識としてしか学習しない。特異能力の発現条件、憶えているか？」

「……魔力を練る際、無意識下で決定される魔力“イド・マナ”の秘造魔力と酸化秘存魔力の含有率のバランスが極端に違つと稀に起こる特別な魔法、というのが狭義だつたか」

「流石の記憶力だな。ははっ、だが非常に残念なことにお前は秘造魔力と酸化秘存魔力の含有率がジャスト1：1なんだよ」

「……………」

つまり店主は紗雨に『お前は才能がない』といつているようなものだ。バランス異常が原因で起こる症状を起こせと言うのにお前は完璧にバランス正常だと言っているのだ。

「……いいか、レジエンディ「オードリエルは何時か大逆を犯す」

「大逆？謀反か？」

「いや、国じゃない。奴は魔術の巣窟を崩壊させる存在だ。それは

まずいんだよ。兄弟」

「……………」

「俺はお前にあいつを殺せとつたつもりだが」

「……分かつてるよ。それでこそ“史上最悪”安部清明だ」

「ははっ。今からすることは決して口外するな。いいな。これは超級禁術、絶対に行使されてはならない万象定理を用いた魔法だ」

「……禁術」

学院時代、特別顧問教師として紗雨に宛がわれた教師から聞いた、世界に10万個存在するという禁じられた術。その名もずばり禁術だと。紗雨も二種類しか名も使い方も知らない。

「禁術・“不法譲渡”」

「不法譲渡……」

告げられた禁術の名を復唱する。聞いたことは、ない。

「この不法譲渡は使用者の秘造魔力と酸化秘存魔力のバランスを崩し、強制的に特異能力を発現させる術だ」

「……そんな術が……」

「あるんだよ。そして使用され、禁止され、忌まれた」

それは古い魔法だ。科学が廃れ、電気が廃れ、代替エネルギーとして“魔力”が発見され、帝国が築かれ、魔法が全盛だった時代にある謀反人によって発見された禁忌の魔法。それが不法譲渡だ。エンジェルギフト神の子に贈られる父からの能力。ちからそれは“罪”を背負う覚悟を持つて受けられるべき術なのである。

「少しばかり準備が必要だからな、今すぐここではできない。ま、特異能力は一生付き合っていくものだからな。よくよくよくよく、もう一つよく考えて、考えた未受けると決めたなら、俺のところに来な。受けないと決めたなら…そのときも俺に所に来い」

言って店主は紗雨の小さな身体に乗っかる華奢な頭をガシガシと掻き回し、踵を返し再び暗闇の中に消えていった。

紗雨と店主が雑木林の中で、特異能力や不法譲渡のことについて話していた翌日の朝。皇立・ストウレゴーネ帝宮学院の女子寮の一室で、とある女が目を覚ましていた。

「……………重い……。雪消…お姉ちゃん、朝から胃袋が口から出そうだよ……………」

というか、起こされていたのである。起床の時間より一時間早く、妹に叩き起こされ…もとい、潰し起こされて。

「失礼なことを申すのだな、姉上。そんな口振りではまるで雪消がおデブのようではないか」

「雪消がおデブでも、おデブでないにしても、寝起きから一人一人を脊椎に乗せれば誰でも重いし、誰でも辛いよ……………」

「ほう、では姉上は自分以外の女は皆スタイル最悪のおデブと言いたいのか？」

「どういふ解釈したらそうなる!？」

そんなことより!と気合で身体を起こす。妹の身体を押し退けてなんとか起き上がる。

妹に押し潰されていた姉の名は秋龍寺 晴間。かの皇女殺し、秋龍寺 紗雨の実の従姉であり、義理の姉に当たる。

そして姉を押し潰していた妹の名は秋龍寺 雪消。かの殺人鬼、秋龍寺 紗雨の実の従姉であり、義理の姉に当たる。

「それより何？あんたが年寄りみたいに早起きなのはいつも通りとして、それが一体どうして私をこんな目に合わせるようになったの？」

ふむ、とベッドから転げ落ちた雪消は転げ落ちた体制のままつまりは尺取虫のように身体を折った体制のまま思案する。

「別に姉上如きに用などないのだが……」

「いろいろ酷い！」

「ううん……」

ふと、晴間の横のベッドで呻き声が聞こえた。

「あつ、雪消、シーツ」

人差し指を唇の前に当て声を潜める。

そういえば晴間のルームメイトが未だ夢の中にいたのだった。

「凍空はまだ眠っているのか。全くだらしのない奴だな」

「いや、まだ寝ていて差し支えない時間よ？あんたが無駄に早いだけで」

「おやおやおや、心外なことを言うでないぞ姉上。たとえ今が起床時間である6時半として、凍空の寝起きの悪さは言うに及ばぬことだろう」

「それは……そうね」

うん、と納得をせざるを得ない。凍空は本当に冗談ではなく冗談のように寝起きが悪いのだ。

「そんな些末なことより姉上、今日の魔法演習の調子はどうか？」

「わー、自分から振ってきたくせに……。……そうね、まずまずね。

魔法は得意だし」

「姉上は学院の中でも最優秀のレベルで成績がいいからな。当然だろうな。……ま、得てして人は見かけによらないものだからね」

満19歳から満22歳までで分類される最高輩層学年の中で秋龍寺 晴間と言うとかなり有名だったりする。2,000人ほどいる最高輩層学年の中で、先輩を押し退き常に成績上位者に名を連ねる強者なのだ。

「雪消は成績不振だからな。さつさと部屋に帰って復習でもしているよ」

「お？珍しく殊勝ね」

「実は雪消の成績が今回良かったら星空がケーキを奢ってくれというのだ。気合を入れない訳にはいかぬだろうて」

雪消のルームメイトで凍空の妹の星空。今回はシンプルに食べ物で釣る作戦に出たらしい。

「だったら早く帰って勉強してなさいよ。私はもう少し寝る」

「今現在優位に立っているからといってキリギリスのように眠ってばかりいると、その内亀に先を越されるぞ。そうだ雪消が今からそんな姉上にかの有名なキリギリスと亀の競争の話をしてやるう」

「早く帰れ！なんか若干混ざってるし！」

あまりの馬鹿さ加減につい凍空のことを忘れ声を大きくする。

雪消はそんな姉の言葉に心外だ……。と呟きながら部屋のドアを閉めた。

「……結局あの子何しに来たんだろ」

ハードカバー、小柄、知的な？物言い、などなど、優等生っぽさ全開の妹雪消なのだ、その実意外と成績が悪くて頭が悪かったりするのだ。だから結構突拍子のないことを言ったり実行したりするのだが……。

まあいつものことだと深く考えるのを、長い付き合いゆえに諦め、ベッドに寝転がる。

別に正直眠たいと言うわけではないが、何だかんだと言っているうちに、意識を手放してしまった。

数時間後に起こる、彼女の人生をがらりと変える事件が偶然に起こることも、そしてその偶然起こるべき事件と、同じ結果を必然的

な手法で弟の紗雨が行おうとしていることも、何一つ知りもせず、知るすべも知らずに。

攻撃は最大の防御と言うが、ならば防御はそもそも存在し得ないのかも知れない

「来たか、兄弟」

都の中心部の学院で晴間が二度寝し、再び雪消に潰し起こされてから数時間が経った都外れの怪しい本屋。『血霞の館』

そこに紗雨はチャイルド・ゲートを引き連れて尋ねてきた。

「嬢ちゃん、連れてきたんだな」

「放っておくわけにもいかんだろう」

「それは勿論だ」

木製のテーブルの椅子を引き、2人に勧めた。杯には既に葡萄酒を用意してある。

「まあ座れや。……で、どうするんだ？やるのか？」

椅子に座って葡萄酒を嚙下するのも束の間、店主が早速といったような、この他に題はない、といった様に本題に入った。

「……本当に、特異能力でないといけないのか？」

「本当に、特異能力でないといけない」

その言葉に紗雨は少しだけ表情を俯かせる。

その存在すら知られないから、やはりあまり知られていないが禁術使用者のことを蔑んで魔女、というらしい。

しかし“魔女”という呼び名が世間に知られていないわけではない。どういふことか。それは特異能力の持ち主のことも転じて、そして侮蔑の意を籠めて魔女と呼称するのだ。

別に紗雨は魔女という呼び名に不満があるわけではない。呼び名も蔑称も紗雨には山ほどある。それが一つ増えようがどうしようが、だからさしたる問題ではないのだ。……ないのだが、特異能力なんて得体も底も知れない能力を受け入れるのは、もう争い事から手引いた、手を引きたい紗雨にとっては一考したい事柄なのだ。

「あれこれ悩むのは若い頃の特権だ。悩むなら悩め」

「悩まねーよ。いいよやるよやってやるよ」

杯の葡萄酒を一気に飲み干し頭と胸をくらくらさせながら立ち上がった。

「不法譲渡エンジェルギフトは幾重もの万象定理を重ね重ね行使する。だから書物なんざに収まるような代物では、だからなくてな。店の裏の路地に魔方陣を書いているから着いて来い。お嬢ちゃんはどうする？」

「まったくなんの話をしているか分からない状況があまり好ましくないのご一緒します」

昨夜魔法で昏睡させたのを未だに根に持っているのかやや態度が棘々しい。

「いい答えだ。存外お嬢ちゃん、いい人材だな。ウチで働くか？」
「勘弁してくれ」

店主の言葉に冷たく返しながら紗雨は、裏口から先に外に出た。

11月28日、冬の深まった都ファイル・ミス・フォーチュン・虚無の楔の外れは肌突き刺さるほどの冷風が、真昼間から吹き抜けていた。

「エンジェルギフトというわけでこれが不法譲渡の万象定理を記した魔方陣だ」

魔法で転写したのだろう、綺麗で綺麗な線で描かれた巨大な魔方陣。それが怪しい路地裏の空き地にでかでかと鎮座していた。

それを紗雨は静かに見下ろし、少しだけ読解してみる。

万象定理を数学的に捉えそれを視覚化した魔方陣は謂わば方程式のようなもので、ある程度パターン化もしてくる。だからそれを辿っていけばどの過程でどの万象定理をどのくらいの割合でどうやって干渉するか。5W1Hが大体把握できるのだ。紗雨の二つ名の一つ、万象図書館マジックボックスにあるような圧倒的で絶対的な万象定理の把握能力を以ってすれば、以ってせずつもある程度の才能と努力があれば大抵とはいわずも中抵の者ができるようになる技術だ。本当の本当に万象図書館レベルになれば魔方陣だけで万象定理全てを理解するこ

とも可能だ。

ということだ読解。

このパターンは『ストウラゴとマジカリアオキスの配合率の決定』の万象定理の応用らしい。……次は…見たこのないパターンだ。恐らく何かの万象定理を、変革するかの如く大胆に応用しているのだろうか……。

と、そのとき。

「ガッ!？」

血を吐いた。

なんだ奇襲かこの金髪顔面凶器め、とも思ったが外傷も痛みも感触もない。内科的な吐血だ。

「おいおいおい、勘弁してくれよ兄弟。禁術がどれだけ得体の知れないものかお前も重々々承知だろう。こんな得体の知れない術の得体の知れない魔方陣の読解を試みちゃおうなんてどんだけ底知れねえ無尽蔵の勇気が馬鹿やろう。ほら目え瞑れ。魔方陣の象形を忘れる」

店主は血を吐いた紗雨の口元を拭いながら呆れ口調でそう言った。つまりはこういうことだ。

「禁術の万象定理は得てしてとんでもない量の万象定理をとんでもない深度で干渉して発動するんだ。いくらお前でも訓練無しで全てを一度に理解しようとする…それも、魔方陣だけで理解するなんざ万死に値する蛮勇…どころか寧ろいつそ死んじまうほどの愚行だぜ、兄弟」

つまりはそういうことらしい。

ともあれ。

そんな些末な症状など紗雨にとっては、あるいは殺人鬼にとっては日常茶飯事とまではいかずもたまに外食する程度の頻度で起こっ

ているので問題は全くない。
というわけで。

血霞の館の店主は：否、“史上最悪”“空前絶後の極悪人”“悪行を悪行で雪ぐ陰陽師”“エクスシズム陰陽術”などなど紗雨に負けず劣らず酷い通り名を持つ陰陽師。

“天上人・阿部清明”はゴキゴキと指の関節を鳴らし、禁術行使の儀式に取り掛かった

第7話 『ガーデ攻撃は最大の防御と云うが、イズムならば防御とはそもそも存在し得ないのかも知れない』

禁術は、どちらかというところ“術”というよりは“儀式”として分類される。

一定の手順、一定の作法、一定の形式をふんで行使する融通の利かない固定されきった術なのだ。

応用に応用を重ねた、変則に変則を重ねた万象定理を使用しながら、いざ発動された術は融通も応用も変則も利かない頑なな術なのだ。

古来より存在する術でありながら、しかしてその当時から完全に完成した術だったのだ。いや、儀式だったのだ。

しかし、今はそんなことはあくまで瑣末でどこまでも些細なことだ。

そんな完了された儀式に掛けられた紗雨の周りが、とんでもないことになっている。

『万象定理への干渉を開始し、魔法を発動します』

『万象定理への干渉を開始し、魔法を発動します』

また。

『万象定理への干渉を開始し、魔法を発動します』

また。

既に紗雨に意識はない。最初の冒頭、万象定理が狂乱したかのごとく鳴り響き続けた時に、それこそ糸が千切れて切れたように意識を手放した。

魔法エネルギーが凄まじい勢いで理論上変換され光やら電気やらが当たりに散る。盈虚の声音もそのうちのの一つだ。

稲妻やら光線やらが当たりにのた打ち回っている。するとふと、その稲妻や光線が紗雨の周りで渦を巻き始め、そして完全に紗雨の身体を封じ込めた。

「さ…紗雨さん大丈夫ですか？なんか、閉じ込められちゃってますが……」

「……わかんねーな」

「わか　！？」

禁術使用に於いてのヤマを越えたのか、あるいは超えたのか、やや表情に余裕が生まれた清明。

「こんなわけのわかんねえ術の状況なんか知らねえよ。盈虚の声音もてんで聞こえてきやしねえ。なまじ応用の利かない術だから何か失敗があればすぐに異常が起こるだろうから大丈夫とは思うが……」
頗る自信の無さそうな物言いである。

やがて、エネルギーの理論上変換も収まってきた。そして紗雨の周りで渦を巻いていた稲妻や光線も、徐々に解けるように消えていった。

紗雨の姿が再び晒される。不自然なほど自然に仰向けに横たわる紗雨の上方に、黄色く、鈍く光る光の球のようなものが浮かんでいた。

バランスを崩した結果、紗雨の体内から放出された酸化秘存魔力、そして酸化秘造魔力これが塊を成して存在しているのだ。

つまりイド・マナに於いて紗雨の秘造魔力と酸化秘存魔力の配合率は9.99:0.01となった。

『酸化秘存魔力を放出すると共に万象定理への干渉を完了し、禁術を終了します』

辺りを照らしていた燦然が、出力を落とすように収まる。

今現在、紗雨は強制的にイド・マナのバランスを崩され、謂わば特異能力の“卵”が出来上がっているのだ。

後はこれを温め、孵化させるだけ。

『スタートスキル【陰陽術】』

酸化秘存魔力と言うのは魔法使いや魔術師が体内で生成する秘存魔力と言うものが、イド・マナを作る過程で、二酸化し、発生した魔力だ。

その過程と言うのが、大気中の酸化秘造魔力を魔法使いが吸収し（便宜上、魔法使いと記述するが魔術師も同様である）、体内で還元する。その際発生した酸素と体内の秘存魔力が化合し、酸化秘存魔力となるのだ。

よって出来上がった秘造魔力と酸化秘存魔力を総じて“魔力”と呼び、酸化秘造魔力と秘存魔力を“魔素”と呼ぶ。

そして、魔法として使われた、若しくは使われて発生したこれらは無害だが、そうでない魔力や魔素は得てして有害なものである。

レジエンディ＝オードリエルの魔術“ランサーシャワー”を消し飛ばした清明の術“陰陽術”

これこそが、特異能力なのだ。

清明の特異能力エクソシズム陰陽術は、大気や大地、海やその他全ての物質、
その中に含まれる魔力や魔素を吸収するという能力だ。

応用すれば術から魔力を抜き取りレジエンディにしたように術を
キャンセルすることも出来る。

が、それは飽くまで戦闘用の応用編。本来の使用は飽きても前者
禁術使用後に発生した酸化秘造魔力は問題ないが酸化秘存魔力がストウラゴオキス
不味い。紗雨の身体から直接出てきたコレは徹頭徹尾飽きる間がなマジカリアオキス
く有害だ。もし仮にこれを吸気として肺に取り込めば肺胞が全て融
解するかも知れない。

清明は己の特異能力で塊を吸収し、ことを全て終えた。

魔方阵は既に消えている。禁術として認識される魔法の魔方阵は
全てこうなるらしい。行使が終われば消えてしまう。

「だ…大丈夫ですか…？」

汗をナイアガラのように流し崩れ落ちるように座り込んだ清明に
声をかける。

「ああ…。お嬢ちゃん。お前さん、紗雨を中の寝室まで担げるか？」

「勿論です、私はちからもちさんですからね」

「だったらお願いするよ。悪いが今の俺には無理なもんでな」

「わかりました」

紗雨の元に歩み、よっこらせと担ぎ上げる。リミッター・チェーン連理の鎖の力が発揮
されれば造作もないことではあるが、生憎連理の鎖をまだ制御できリミッター・チェーン
ていないので、そんなことそもそもできないのかも知れないが、
残念ながら軽々とは出来ない、が。存外チャイルド・ゲートも本当
に“ちからもちさん”なのか、本当に本当の意味で担ぎ上げて館の
中に入って行った。

「姉上……」

医務室。

皇立・ストウレゴ―ネ帝宮学院の誇る皇室級の設備を持つ医務室だ。

其処の待合室に座り込んでいるのは秋龍寺 雪消。

姉の容態が心配でならず、昼からずっと此処に座り込んでいる。

「雪消」

頂垂れる左肩に冷たい手が置かれた。

ゆっくり振り返るとそこには姉のルームメイトの凍空だった。奥には自分のルームメイトの星空もいる。

「雪消、行こ？」

優しい凍空の声。そこではつと気付く。周りが真っ暗だ。

「もう2時だよ。寮監には言っておいたけど、帰らなきゃ」

凍空が雪消の腕を引っ張り、立ち上がらせる。

「しかし、凍空……。雪消は…姉上が……」

「心配なのは分かるよ。でも大丈夫。身体には異常はないよ」

「だが万象定理の毒素で精神崩壊の一手手前の状態だったと……」

「そう、でももう大丈夫。今はもう落ち着いて、眠っているんだって」

「そうか……。そうか……」

それでも雪消は陰鬱な表情で顔を俯かせる。

「姉上は……」

「特異能力を、発症したそうよ」

「……」

凍空の言葉に動揺と呆然、そして悲観に息を呑む。

が、驚愕はしない。雪消も予想は付いていた。

姉が、魔女になるということ。

「ん……」

身体になにやら感じる重みで目が覚めた。

ズキズキと痛む頭を押さえて紗雨は身体を起こした。足の付け根

辺りを枕にチャイルド・ゲートが眠っていた。

「おう、起きたか、兄弟」

木製のドアを開け、小麦パンと焼いたヤギ肉を持って店主が現れた。

「ああ……。俺、どうしたんだ？」

「不法譲渡エンジェルキフトの行使中に気を失ったんだ。いや、心配することはない。万象定理干涉の負荷に耐えるように脳が機能を落としたに過ぎん。よくあるだろう」

「そうか。それで、どうなったんだ？」

「お前のイド・マナのバランスは著しく崩された。大量の酸化秘存マジカリア魔力が放出されたから恐らく秘造魔力ストウラユが多くを占めることになったんだろうな」

「特異能力は？」

「これから開発する。今のお前が特異能力の万象定理を行使すると特異能力が開花されるというわけだ。不法譲渡エンジェルキフト二段目の魔方陣だ。ただ、もう少し心身が落ち着いてからにしよう」

「分かった」

息を吐きながら身体を倒し、再び枕に頭を埋めた。

「お嬢ちゃんに飯を持ってきたんだがな。パンと肉。食べるか？米の方がいいか」

「粥が欲しい」

「分かった。ちよつと待ってる」

店主はテーブルに皿を置き、部屋を出て行った。

「特異能力、か」

特異能力。

それは魔法使いにとって侮蔑の対象であり、しかし同時に能力と権力の象徴でもある。

実際、特異能力保持者は魔女と罵られるが、一方魔法溢れるグレイネス・エンバこの国の皇帝イアとなりえる条件はとある特殊な特異能力を発現するか否かだ。

故に特異能力は嫌悪と忠誠を同時に兼ね備える全く歪な存在なのである。

それはそうと皇帝となりえる為の条件の特異能力。

それは紗雨が皇女、キャロルを殺さねばならなくなった理由の一端である。

はあ、と紗雨はため息をついた。唐突に嫌なことを思い出したものだ。

「ん…、紗雨さん」

「起きたか」

「こっちの台詞ですよ！心配ばかりかけて！なんなのですかあのわけの分らない術は！説明を激しく要求します！」

寝起きから大声で啖呵を切ったチャイルド・ゲートに紗雨は気まぐすそうに目を逸らし、そして説明を始めた。

「身から出た錆ですね」

「手厳しいな」

「それで？特異能力はどうなったんですか？」

「俺の体力が回復したら本格的に取得を始める」

「そうですね……」

あれから半時ほどじっくりと説明をして、説明をしながら自分の考えをまとめて、そしてチャイルド・ゲートから先のお叱りを受けたのだ。

「まあ、俺は殺人鬼だからな。こんなことはよくあることだ」

「紗雨さんは強いですからね、あまり心配はしていませんがその…」

「…」

「なんだ？」

「特異能力…本当に習得する必要はあったのですか？」

「どついうことだ？」

「これはあくまで相対性の話ですが、紗雨さんとその方はどちらも私と一度対峙しています。紗雨さんの場合は自律駆動と狂闘戦士の状態です」

「……話を阻んで申し訳ない。狂闘戦士ってなんだ？」

「魔力征服の能力の一種です。自律駆動とは逆を行く能力で、私の身体の強化をはなから無視して意識を完全にリミッター・チェーンに明け渡すという能力と、その状態の私です」

「なるほど」

「自らを連理の鎖の魔力体だと名乗った彼女を思い出す。狂闘戦士、なかなかどうして絶妙なネーミングだな。」

「続けましょう。紗雨さんは自律駆動は元より狂闘戦士まで退けた。これは驚くべきことです。対して彼……なんと仰いましたっけ？」

「レジエンディ＝オードリエルだ」

「そうレジエンディさん。そのレジエンディさんは自律駆動の私を退けられませんでした。……いえ、それが順当なのですが……。ですから相対的には、そんな新能力を身に付けるほどではないかと」

「……しかし、実際問題レジエンディは強いが」

「“強い”からといって“勝てない”わけではないでしょう」

「……」

だとするとどういうことだ？店主は紗雨の力量も、レジエンディの力量も、十二分に理解しているはずだ。

そして仮に、紗雨が新たに特異能力を身に付けるまでもないと分かっていたとしたら。分かっているながら紗雨に不法譲渡を行使したとしたら。

何か企みがあるというのは赤子でも分かることだ。

「……ま、言って仕方のないことだ。もう特異能力の核を持つちまつたんだし、今不必要でも今後必要になったときその手間が省けたと思えば」

「そうですね。ふふっ、紗雨さんって存外前向きな人なんですネ。陰険な根暗のマイナス思考だと思っていました」

「お前の中の俺はどうにもダメなほうに脚色されているようだな」

「気のせいです」

「そうなのか？」

「若しくは私の目に紗雨さんがそう映っているだけです」

「俺、お前に何かしたか？」

「それはもう」

はあ、とため息をつき反論放棄。

特異能力完全習得の為に眠ることにした。

そしてこの特異能力こそが、後に世界中の万象定理を巻き込む、大勝負。

皇女殺しと万象定理の主との争いの火蓋が切られることになる切欠となる。

防御を最大の攻撃とし、守護神の名を冠しながら防御を棄て、刃と盾を一身に背負う、隙の一切ない能力を有することになる秋龍寺紗雨の運命は、あと3時間後に崩壊する。

攻撃は最大の防御と言いますが、ならば防御はそもそも存在し得ないのかも知れない。今回はわりと重要な回でした。

紗雨の特異能力は次回覚醒します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9640u/>

チャイルド・ゲート

2011年11月20日18時47分発行